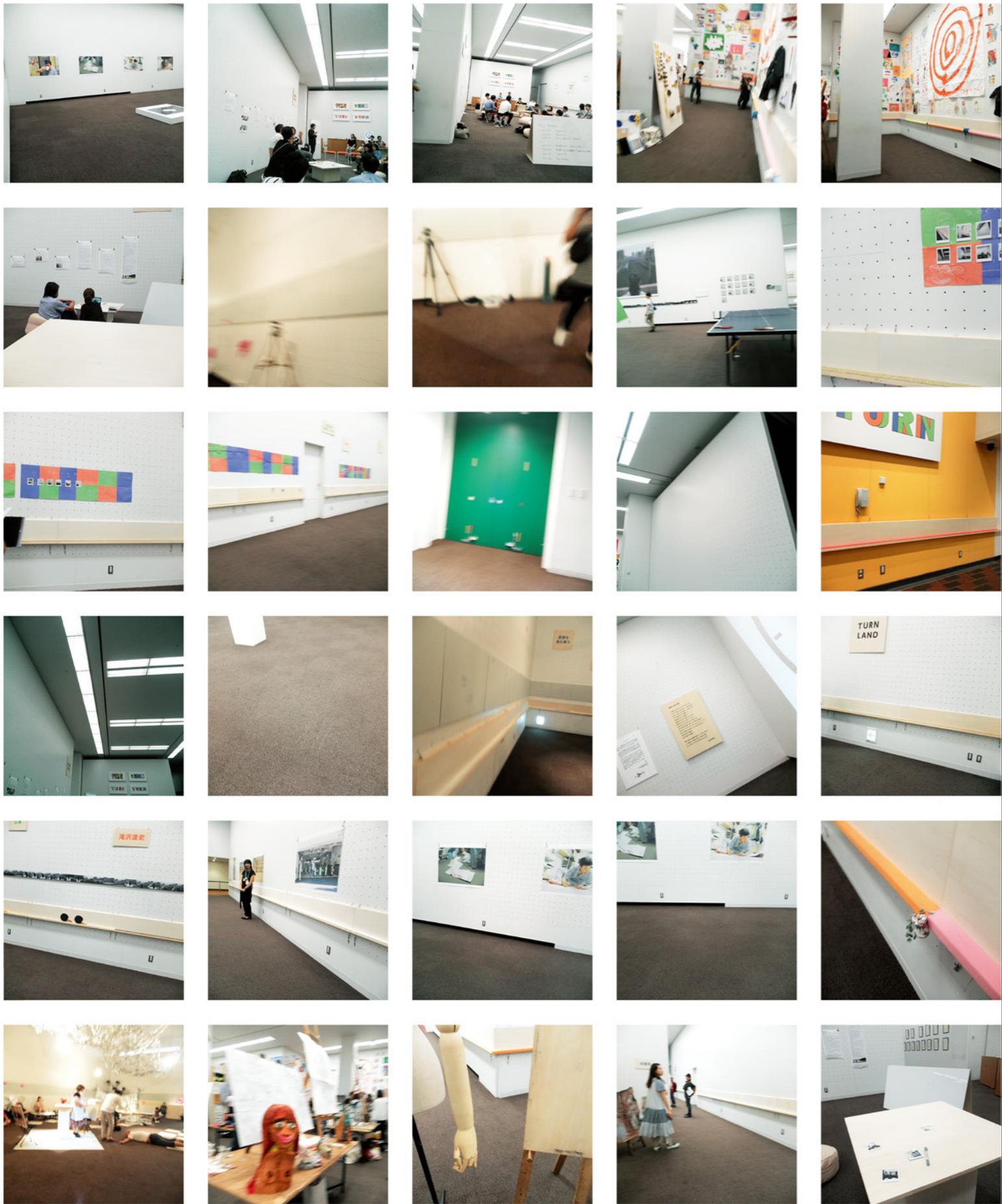


TURNフェス3ドキュメントブック2017





TURNフェス3 ドキュメントブック 2017

他者と自分の間

その間は、近くなったり、遠くなったりする。

近くなって嬉しいとき、遠くなって安心するとき

近くなって苦しいとき、遠くなって寂しいとき

私から他者に近づいたり離れたり、

他者が私に近づいたり離れたり

他者が気になるとき、気にならないとき

他者を気にするとき、気にしないとき

他者から気にされるとき、気にされないとき

気になる曇り空な感じ、気にならない晴れた空な感じ

気にするというアクション、気にしないというアクション

気にされる嬉しさもあるし、気にされる辛さもある…。

他者と共有できる時間

自己と対話できる時間

他者と自分の間の関係は固定されているものではない

いつも自在にその間を行き来できる自分と他者、

行ったり来たりTURNできる間のあり方とは…。

日比野克彦

T U R N

見る・知る・TURNする！

TURNフェス3 開催概要

会期：2017年 8月18日(金)～20日(日)

開室時間：18日(金) 9:30～21:00
19日(土)・20日(日) 9:30～17:30
(入室は閉室の30分前まで)

会場：東京都美術館 (東京都台東区上野公園 8-36)
ロビー階 第1・第2公募展示室

監修：日比野克彦 (アーティスト、東京藝術大学美術学部長・美術学部先端芸術表現科教授)

主催：東京都、アーツカウンシル東京・東京都美術館 (公益財団法人東京都歴史文化財団)、
特定非営利活動法人 Art's Embrace

運営補助：TURNフェス・サポーター

TURNツアー実施協力：東京都美術館 × 東京藝術大学「とびらプロジェクト」

目次

1 — テーマ：アクセシビリティ	9
手で触れるサイン計画	10
身の回りのあるテクノロジー「アルテク」	12
井谷優太 と 富田了平	16
認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ と テンギョウ・クラ	18
TURNツアー	20
人という資源を活かしたアクセシビリティ 奥山理子	22
社会の中のアクセシビリティ -TURNフェス3 サポーターに聞く-	23
NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク	27
欠落は新しい能力の扉を開いてくれる 馬場正尊	28
2 — エキシビション&パフォーマンス	31
山縣良和 と ここのがっこう と しょうぶ学園	32
山城大督	38
高橋正浩 と 池田晶紀 と 川瀬一絵	42
富塚絵美 と マダム ボンジュール・ジャンジ	48
ありのままに存在することの喜び アオキ裕キ	54
滝沢達史	56
今井さつき と シューレ大学	60
らくだスタジオ	64
大西健太郎 と 板橋区立小茂根福祉園	68
現代芸術活動チーム【目】	74
3 — トーク	79
高本敦基 と 社会福祉法人旭川荘 交流プログラム公開ミーティング	81
TURN in BIENALSUR 出発直前トーク	82
新しい学びを考える	84
TURN LAND をひらく	86
アクセシビリティミーティング	88
TURNフェス3 クロージングトーク	90
会場構成	92
プロフィール・施設紹介	94
年表：TURNフェス3に関わる主な活動	98
あとがきにかえて 森 司	102

1

テーマ：アクセシビリティ

TURNフェス3はアクセシビリティをテーマとして開催した。アクセシビリティとは、障害の有無や年齢などを問わず、誰でも必要とする情報や体験を利用できることをいう。近年、文化事業においても、他分野との多様な結びつきや、実施における合理的配慮が求められ、障害の有無に関わらず、芸術体験の参加を促す機会をつくり出すアクセシビリティサービスの向上に関心が高まっている。

TURNフェス3では、匿名の当事者を想定したアクセシビリティではなく、TURNが根幹に据える「交流プログラム」を通して出会った人たちなどを具体的に思い浮かべたり、彼らと実際に関わったりする企画を通じて、「○○さんが参加できるフェス」を軸に「TURNのアクセシビリティ」を展開した。あわせて会場冒頭のエリアを「アクセシビリティ」と名付け、テーマと関連の深い作品を展示、紹介した。

近年、法制度の見直しとともに、新たな法律の設計を通して多様な人たちが共存する社会の実現に向けた整備が進められている。平成18年に国連が提唱した「障害者権利条約」を受けて、「障害者基本法」（平成23年8月改正）や「障害者総合支援法」（平成25年4月施行）、「障害者差別解消法」（平成28年4月施行）など、障害に関わる制度改革が積極的に行われている。また教育の分野では、「教育機会確保法」（平成29年2月施行）が成立し、不登校の子供たちへの支援と必要な財政上の措置が国や自治体の責務と定められた。そして平成29年6月、「文化芸術振興基本法」が「文化芸術基本法」へと改正され、基本的施策に高齢者及び障害者の創造的活動への支援などが明記された。これにより、従来からの文化芸術そのものの振興に加え、観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業など幅広い分野も含めた施策の推進と、行政機関・文化芸術団体・民間事業者・学校・地域などとの連携をはかり、文化芸術に関する施策が更に推進されていくことが期待されている。

手で触れるサイン計画

馬場正尊

何かに触れていると安心する。なぜだろう？
私たちはおそらく、少しでもちゃんと周辺を認識し、
自分の存在を確かめたい。
指先で、足の裏で、伝わってくる振動で、
空気の流れて、わずかな匂いで、かすかな音で、
人の発する感情の揺れで。
《知覚のライン》は、その小さな手助け。



目を閉じて触ることで、何ができてきた？



暮らし方を想定した建物のリノベーションやまちづくり計画で活躍する建築家の馬場正尊は、緑内障の進行によって、現在ほとんど視力を失っている。これまで自身の病気を公にしてこなかった馬場が、本フェスでその障害を前提としたサイン計画を立案。何か手がかりがあると空間を把握するときの安心感につながるという自身の体験から、《知覚のライン》という手すり状のサインを会場の壁面に巡らせた。手に触れるサインのテクスチャーは各展示室ごとに変化を与え、さらに会期中に日比野が即興的にテクスチャーを加えていった。



触れている感覚で、人の気持ちは揺れるだろうか？

知覚の周囲に優劣はあるのかな？

身の回りにおけるテクノロジー「アルテク」

東京大学先端科学技術研究センター 巖淵研究室

「アルテク」とは「すでに身の回りに『あるテク』ノロジー」の意味をもつ造語。日常生活に普及しているITへの視点を少し変えて使うことで、さまざまな困り感を解消でき、障害のある人たちがさまざまな情報や場所へアクセスできるようになる。会場では、スマートフォンやタブレットの高解像度カメラ機能を応用した観察支援ツール「OAK」、指でタップした箇所の内容を音声で読み上げてくれる読み書き支援アプリ「タッチ & リード」、時間感覚を変えることで生活を支援するアプリ「ラッキーロック」など、^{いわぶち}巖淵研究室で開発されたアプリケーションを中心にアルテクを紹介した。また、アルテクを堪能するための小部屋として、壁面に日比野のドローイングが施された「ペーパードーム」を設置した。



巖淵研の巖淵守(写真上)と武長龍樹(同下)が来場者への質問に対応し、アルテクを介したさまざまなコミュニケーションが生まれた。

OAK

タブレットやスマートフォンのカメラを利用し、動きの変化をサーモグラフィーのように可視化したり、わずかな動きによってライトなどを点けるスイッチに応用したりすることもできる。動きかけへの反応が読み取りにくく発語のない人とのコミュニケーションを支援するために、彼らの応答をきちんと観て共有することに活かされている。



読み上げ機能

スマートフォンなどに搭載された、画面に表示された内容を音声で読み上げる機能。読み上げの音声スピードを調整することもでき、聞きながら読むことを通して、読書量がこれまでの3倍になった視覚障害のある人もいる。



タッチ&リード

印刷された文字を認識して読み上げたり、読み込んだ画像の中にタイピングや音声認識によって書き込めるアプリケーション。学校で1クラスに一人程度はいるとされる読み書きに困難を抱える子供たちの学習活動に役立つ。こうしたツールを利用していきいきと学ぶ子供たちがたくさんいる。



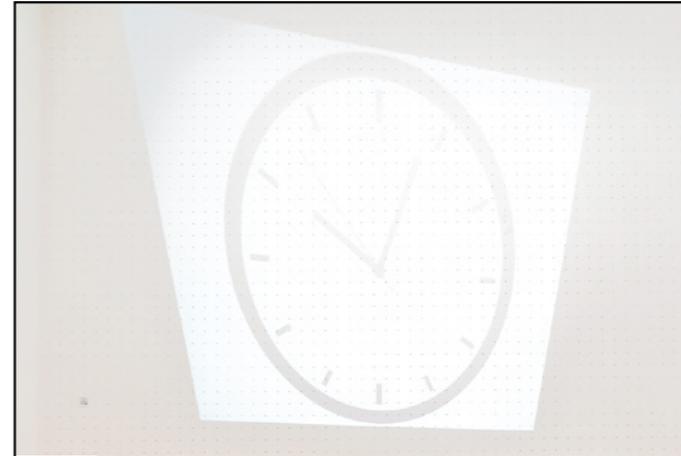
UDトーク

会話の内容がすぐに文字になって表示される。みんなが何を話しているのかすぐにわかり、文字入力で応答することもできる。聴こえない人が聴こえる人と文字によって会話するために使われる。



ラッキークロック

実際の時間よりも少し早く針が進む時計。設定された夕方の時刻になると、実際の時間に戻る。その標準時間との差がゆとりの時間として生まれる。忙しさの増した現代社会では不適應を起こす人も増えている。自分で時間をコントロールできると感じることで、心理的ゆとりを生み出すことや、実際に働き方を変えることが目指されている。



イヤーマフとノイズキャンセリングヘッドフォン

騒音のひどい場所にいたり、疲れていたり、音への過敏があったり。身の回りの音がすべて同じくらい大きく聞こえ、音に飲み込まれてしまうようで、驚いたり不安を感じたりする。そんなときは、イヤーマフやノイズキャンセリングヘッドフォンをつけると、頭の中が静かになって少し安心できる。



車椅子でやってくるパフォーマー

井谷優太と 富田了平

「そもそもどうやってここまで来ているの？」脳性麻痺のある電子音楽家（パフォーマー）の井谷優太が TURN の事務所を頻りに訪問する中で、ある日 TURN コーディネーターの奥山理子が尋ねたこのやり取りをきっかけに、ドキュメント映像の企画が生まれた。TURN では、アクセシビリティを来場した時点から考えるのではなく、会場までの道程を知ることが重要だと考え、井谷が実際に自宅から電車を乗り継ぎ東京都美術館に来るまでのプロセスを、ビデオグラファーの富田了平が追うという構成にした。「東京は隅々までインフラが整っているから（実家のある）鳥取よりもはるかに移動がしやすい」と井谷が言っていた通り、電動車椅子はスイスイと道を進んでいく。その一方で、狭い通路で人と行き違うときにしばらく待っている時間があるなど、映像を見ることで初めて気づくことが多い。映像の音楽は井谷が担当している。



上野までの道中をライブ中継

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ
と
テンギョウ・クラ

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツを利用する二人(太田燎さん・鶴見凌さん)が、レッツのある静岡県浜松市から上野の東京都美術館を訪れるまでの道中を、同行したテンギョウ・クラが撮影。その写真を会場内のタブレット端末にライブ配信するプログラム。美術館到着後、彼らがテンギョウ・クラとともに会場内を巡り、他の展示スペースのベッドに横になったり、パフォーマンスを眺めたり、ミーティング中の交流スペースを横切ったり、自由気ままに過ごす様子を会場全体で受け入れていた光景は、TURNフェス3を象徴するかのようだった。



会場へ配信!



僕は今回、浜松の福祉施設「クリエイティブサポートレッツ」の皆さんとコラボレーションさせていただきました。フェスの初日にレッツの利用者さんたちとスタッフさんたちが浜松から上野に来るまでをカメラに収めて、会場である東京都美術館のタブレット端末で同時中継するというものでした。それに先立って、1週間レッツに滞在して交流をさせてもらい、少しでもスタッフさんたちと利用者さんたちの信頼関係を見ながら自分のレッツとの関わり方を考えることができました。それぞれのルートを経て、初日の18日に太田さんとスタッフの佐々木雄一さんが、翌19日には鶴見さんとスタッフの山森達也さんがフェスの現場に来てくれました。まず驚いたのは、会場で太田くんが終始満面の笑みを浮かべていたことです。実は太田くんはレッツに通っている人たちの中で僕がコミュニケーションをとりづらい数少ない利用者さんの一人でした。それは無表情でいることが多い彼の様子から考えていることが読みにくいこともあったし、彼の体の迫力に圧倒されていたこともあったと思います。

———テンギョウ・クラ

TURN 公式ウェブサイト「タイムライン」
2017.9.1「TURNフェス3が生み出すコンフォートゾーン」より

TURNツアー

フェス3の期間中には、各プログラムの見どころやTURNのアクセシビリティを紹介するさまざまなツアーが開催された。日比野や参加アーティスト、東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」のアート・コミュニケータ「とびラー」などが案内役となり、それぞれの見方による多様なフェスの楽しみ方が提示された。

TURNツアープログラム

8月18日(金)

- ① 11:00 ~ 11:30
案内役：奥山理子 (TURNコーディネーター)
- ② 14:00 ~ 14:30
とびラーによるTURNさんぽ
- ③ 16:00 ~ 17:00
レッツメンバーとめぐるTURNフェス
- ④ 18:30 ~ 19:00
案内役：今井さつき (アーティスト)



8月19日(土)

- ① 11:00 ~ 12:00
案内役：石川絵理 (NPO法人TA-net 事務局長)
- ② 13:30 ~ 14:00
案内役：日比野克彦 (TURN監修者)
- ③ 15:30 ~ 16:00
とびラーによるTURNさんぽ

8月20日(日)

- ① 11:30 ~ 12:00
らくだスタジオ TURNフェス記録ツアー
- ② 13:00 ~ 13:30
案内役：井谷優太 (電子音楽家)
- ③ 15:30 ~ 16:00
とびラーによるTURNさんぽ

ツアーレポート

案内役：石川絵理 (NPO法人TA-net 事務局長)

「私は耳が聞こえません」という手話による呼びかけからツアーを開始した石川絵理。ツアー参加者は、手話通訳者の声に耳を澄ませながら会場を巡り歩き、聞こえてきた印象的な音を会場マップにメモしていく。最後に交流スペースに到着した参加者たちは、それらの印象的な音を石川に伝えるために、色紙や色ペンを用いて形を作り、模造紙に書かれた大きな会場マップに貼り付けていった。ギザギザに切り取られた不思議な形の色紙から、立体的な構造物を丹念に作って貼り付けたものなど「音」から「形」へ変換されたマップを見ながら、石川と参加者たちの対話が始まる。参加者の一人が伝えた「緊張した時に聞こえた音です」というコメントに対して、「胸のドキドキは音で聞こえたりするんですね」と石川が応答するなど、「音」に対する感じ方の違いについて共有する、興味深いツアーとなった。



案内役：井谷優太 (電子音楽家)



「アクセシビリティ」エリアに展示された、井谷優太と富田了平のドキュメント映像の前に集合したツアー参加者。まず富田が、撮影当日の様子についてのエピソードを語り、その後、井谷と参加者を交えて互いに気になることを質問しあった。普段は一人で外出するという井谷だが、「でも好きな人には同伴してほしい」と言うと、「それ、誰でもそうじゃないですか(笑)」と参加者も返しながら和やかな雰囲気。次に向かったのは、井谷のお気に入りの場所という、富塚給美とマダム ボンジュール・ジャンジの《光の広場》のエリア。皆で鑑賞したあと、最後に交流スペースへ移動すると、井谷がパフォーマーとしての姿を披露してくれた。普段使用している作曲ツールを説明しながら、その場で自作の曲を演奏する井谷のエネルギッシュな様子に、参加者たちは思わず引き込まれた。

人という資源を活かした アクセシビリティ

奥山理子

TURN が考えるアクセシビリティサービスの一つとして、「TURN ツアー」という鑑賞プログラムを実施した。サービスと書いたが、TURN においては、具体的なツールや方法を用いることによって特定のニーズに応えるという性質のものではない。人と人が互いの興味や関心にもとづいて出会い、コミュニケーションの方法が互いに異なる場合には、その場で工夫しあうこと自体をコミュニケーションと捉えて楽しむ、そんな関係性が自然と生まれるようなきっかけや空気感をつくり出したいという思いを出発点として計画した。ツアープログラムは全10回。初回は私が全体を網羅的に、かつ作品やパフォーマンスの背景に触れながら回るギャラリートークのような形から始まり、フェスに参加した TURN のプロジェクトメンバーが数珠つなぎのようにして案内役を担っていった。また、東京都美術館で活躍するアートコミュニケータ「とびラー」も3回にわたり、同美術館での経験を活かした独自のプログラムに取り組んでくれた。

ツアーの参加者には、事前にプログラムを見て興味ある案内役が登場する時間に合わせて来た人、たまたま居合わせた時間帯に参加した人、そして、自分以外の活動を知る機会が普段はないからと、熱心に耳を傾けるフェスの参加アーティストや他のプロジェクトメンバーの姿があった。案内役はというと、いずれも自分が経験して得た観点を存分に用いて案内するため、どの回も、足を止める場所や時間、説明する内容が異なり、一つとして同じツアーにならなかったことが、TURNらしさにつながった。

そして、過去2回の成果報告的なフェスとも大きく趣向を変え、会場で起こっている出来事との出会い方の

バリエーションを紹介することができたように思う。とくに、TA-netの石川やレッツのメンバーなど、障害のある当事者が案内役になった回では、まさに冒頭に書いたような、コミュニケーションの方法の異なる者同士が場を共有する体験となる。案内役から提案される新しいコミュニケーションの交換だけでなく、ただ彼らの後ろについて歩くだけでも、目に映る光景は新鮮味を帯び、記憶に残る事柄には、少なからず変化をもたらしたことだろう。そして「障害のある当事者」などという表現が何一つ彼らのことを表していない言葉だということを知る。

「最大の社会資源は人」という考え方は、ソーシャルワーカーでもあるみずのき施設長の沼津雅子から教わった。TURN ツアーはまさに、人という資源を積極的に活かしたアクセシビリティサービスの試みだった。さて、TURN フェス3が閉幕して間もなく、私は東京藝術大学履修証明プログラム「Diversity on the Arts Project (DOOR)」という講座で集中講義を行った。受講生の中には、実際にサポーターとして関わった人、観客として訪れた人も多数おり、TURN フェス3でどのような体験をし、どのような印象を受けたかについて、プレゼンテーションやディスカッションを交えながら振り返る時間を取った。その中で彼らは、TURN をもっと全身で体感したい、より多くの人へ伝えたい、こんなことやあんなこともできるんじゃないだろうか、実に多種多様な意見を聞かせてくれた。その様子にすっかり圧倒された私は、まだまだ TURN フェスを充実させることは可能で、その充実を支える人たちは、すぐそばで出番を待っていることに気づくことができた。次回のTURN フェスでは、もっと多くのツアープログラムが生まれ、もっと多くの人々がTURN フェスをアテンドする主体者となってくれることだろう。想像するその光景を実現できるよう歩みを止めることなくTURNを探求していきたい。

社会の中のアクセシビリティ —TURN フェス3 サポーターに聞く—

一般公募で集まるTURN フェスを支えるサポーターには、年齢や職業、社会的な役割や立場など、さまざまな人が参加している。フェス3のサポーターの中から3人の方に、TURNに関わるようになったきっかけや、今回テーマとして掲げたアクセシビリティについて話を伺った。



左から小池志麻さん、前田昌弘さん、高橋大斗さん

さまざまな人びとが集うTURN フェスサポーター

—— まずはTURN フェス3にサポーターとして参加した動機と、差し支えなければ普段のお仕事を教えてください。

小池 TURN フェス2 [2017年3月3日(金)~5日(日)]のときに森山開次さんの映像作品が見たくて行ったのが最初なんです。面白いと思って、次回は何か関わってみたいかなと思いました。その後、去年の4月から始まったDOORを受講したところ、授業の中でTURNにも関わるようになり、フェスのサポーターも募集しているということだったので、フェス3でサポーターとして参加しました。普段は障害者の福祉施設で働いています。

前田 私は普段は全く福祉やアートとは関係のない仕事をしていますが、TURN フェスの初回 [2016年3月4日(金)~6日(日)]

を来場者として見て、小池さんと同じように私も何か携われたらいいなと思ったのがきっかけです。フェス2のときに初めてサポーターに応募して、フェス3も続けてお手伝いさせていただきました。

高橋 都内の大学で文化政策について学んでいる大学4年生です。2015年から、アーツカウンシル東京が主催するTARL*にも参加してしまっていて、TURNが始まったときに手伝ってみたいかと勧められたのがきっかけで、初回のフェスからサポーターとして携わっています。

—— フェス3でサポーターとして担当されたエリアと、フェスの全体的な印象や過去のフェスとの違いなど、感じたことがありましたらお聞かせください。

小池 私は職場が休みの土日を利用して2日間参加しました。1日目は高橋正浩さんと池田晶紀さんと川瀬一絵さんの《ロードショー》(p.42)のところに終日いて、翌日は交流スペースのエリアを担当しました。全体としては、フェス2よりもフェス3の方が、一つひとつのプログラムで、施設や主役となってる人たちとアーティストの関わりがわかりやすかったなと思いました。

前田 それは私も感じましたね。私は3日間いたんですけど、持ち場もいろいろやらせていただいて、初日は塚本美さんとマダム ボンジュール・ジャンジさんの《光の広場》(p.48)にほとんどいて、その日の終わり頃に少し《ロードショー》を担当しました。2日目からは、入口の「アクセシビリティ」エリアに比較的長くいて、合間にチラシ配りやツアーのサポートもさせていただきました。

高橋 僕は初回のフェスとフェス2は3日間参加していましたが、フェス3に関しては都合がつかなくて最終日の1日だけ参加しました。基本的には「アクセシビリティ」のエリアと山城大督さんのエリアを担当して、山城さんとは顔見知りだったこともあっていろいろな話をさせていただき、伊藤亜紗さんがゲストで来られたキックオフ・フォーラムも興味深く聞いていました。

小池 個人的に印象的だったのは、交流スペースではトークがない時間は比較的余裕があったので、他のところも見て回ることができたんですね。そのときに偶然《ロードショー》の主役の高橋さんが会場にいらして、床に高速道路の地図を広げているのを目撃できたことです。「うわー、高橋さんだ！」ってスターに会ったみたいに興奮しました(笑)。

前田 高橋さんは、たしか最終日の午前中にいらっちゃって、最初にご自分の映像を上映ブースでご覧になっていたんですね。それを一通り見終わったあと、「じゃあ、新しい地図を広げてみるか」って感じで広げはじめたので、小池さんはちょうどそのタイミングに居合わせたんだと思います。

小池 そうだったんですね。いらしていたのも知らなくて、たまたま私は前日に《ロードショー》の担当だったから、パッと見て高橋さんだっけ分かったけど、知らなかったら普通のおじさんだと思って通りすぎていたかもしれないです(笑)。そういう意味ではラッキーだったと思いますけど、「高橋さんが地図広げてますよ」ってアナウンスされて行ったんじゃないって、タイミングというか縁というか、私がそこにフッと引き寄せられたというのがTURNらしいのかなと思いました。

前田 私は19日のTA-netの石川絵理さんのツアーにも参加したんですが、石川絵理さんは耳が聞こえない方なので、会場を巡っていったあとに、ツアー参加者が交流スペースで作業しながら会場で聞こえた音を視覚的に表現して、それを石川さんに伝えるという内容でした。皆さん表現の仕方や着目点が面白くて、特に印象に残っているのは、おしゃべりが禁止になっている《光の広場》のエリアの静かなイメージを視覚的に表現される方が何人かいらっちゃったことです。「音」といっても、人間ってたぶん単純に音そのものというよりは、いろんな視覚的な印象やイメージを織り込んで受け取っているんだなと思いました。

TURNのアクセシビリティとは

—— フェス3で掲げたアクセシビリティというテーマに関して特に気づいた点はありましたか？

前田 全部のコーナーに一貫して《視覚のライン》が通ってましたよね。それを伝いながら現代芸術活動チーム【目】の

方が目と耳をふさいだ状態で歩き回っておられたので、アクセシビリティというのが全体につながってるなっていうことはすごく感じることができました。《視覚のライン》は、よく見てもらえばわかるんですけど、各エリアごとに少しずつ違ったんです。例えば《ロードショー》のエリアでは写真のフィルムが貼ってあったり。そういうさまざまな工夫に気づいていらっやらない方へこちらからお伝えすると、すごく興味を持って聞いてくださって、それからずっと触っていかれる方もいらっやいました。

小池 前田さんは《知覚のライン》が全体をつなげるアクセシビリティの仕掛けだということに、いつ気づきましたか？

前田 初日は《光の広場》が担当だったので、最初はその会場内でどうするかということしか考えてなかったんです。だから、初日の終わりがけに《ロードショー》の場所に移動したとき、《知覚のライン》が《光の広場》のものと少し違うなと初めて気づきました。見ている来場者の方にもそのことをお伝えすると、「あ、面白い」と言っていただけなので、これは今回のTURNのコンセプトを伝えられる、ひとつのツールなんだと気づいたんです。翌日は「アクセシビリティ」のコーナーを担当したので、ここから《知覚のライン》が始まっていて、ずっと続いているんだということがはっきりとわかりました。

高橋 TURNフェスは個人的には毎回面白くなっていると思うんですけど、参加していない人には伝えにくいところがあったんです。僕自身はとてもTURNのコンセプトは腑に落ちているんですが、初回のフェスとフェス2のときはそれを他人に伝えるのが難しかった。それがTURNフェス3では、「アクセシビリティ」という具体的な言葉でテーマを言えるようになったのは大きかったと思います。実際、アートや障害者支援に限らず、立場の違う人に対してアプローチしていくことに興味がある人たちに、届きやすくなったんじゃないかなと感じました。

—— 高橋さんがTURNのコンセプトが腑に落ちているという点をもう少し具体的に聞かせていただけますか？

高橋 最初のTURNフェスのときは「手伝ってください」と言われたから行ったというのもあって、よく理解していなかったんですけど、会場に入ったら、日比野さんの書かれた

ステイトメントにTURNのコンセプトがちゃんと説明されていて、これは自分が研究してることにピッタリだなと思った記憶があります。たしか日比野さんは、TURNを「人間に戻ってくる力」のようにおっしゃってますよね。僕は大学で、「理想的な社会」と「現実の社会」の関係性について勉強していて、そこで神秘主義というものを研究しています。神秘主義を簡単に説明すると、神様のような絶対者による世界が僕らの上であって、僕らはそれを目指しているという考え方なんです。そういう神秘主義的なところに人間の理想形があり、その世界ではきっとみんなが平和に暮らしている。でも社会が近代化していく中で、そういったユートピアの世界に入っていくとする状況がすごく減ったと思うんですね。ユートピアというのは本来は実現しない理想のことなんですけど、実現しなくてもそこを目指していくということが重要で、そういった考え方と、日比野さんがおっしゃるTURNの「人間に戻っていく力」というのが、僕の中でリンクしたんです。

小池 わー、素晴らしいですね！

高橋 例えばお祭りのときの無礼講というのは、普段の立場が崩れる瞬間ですよ。僕はTURNというのも無礼講の一種だと思っていて、知らない人や違いがある人のお互いの立場が崩れ去っていく瞬間、そういうところに僕たちが入っていくとする力がTURNだと思っています。そのコンセプトが、フェス2では、皆の関係がフラットになっている作品が多かったのと、僕もそれを意識できるようになっていたの、より腑に落ちるようになりました。それがフェス3ではさらにアクセシビリティをテーマにしたことで、より具体的に見えてきたなと思いました。アクセシビリティは、神秘主義的なユートピアに近づくための手段というか、システムのひとつのようにも考えられて、僕の中では、TURNフェスが回を重ねるごとに、理念としての抽象的な概念にひとつずつツールが備わってきているような感じがしています。

小池 アクセシビリティという言葉は、普段働いている支援現場では使っていないんですけど、もしかしたら当たり前のようにいつも駆使していることなのかなと思います。いろんな障害を持った人が半数近くいる中で、彼らとやり取りするために、その人の見ている層から世界を見てみたり、いろんな階層の中に日々アクセスしているんですね。そのように、

いかにして行き来していくかということが、私の中でのアクセシビリティなのかなと、今お話を聞きながら気づきました。

それぞれが考えるアクセシビリティ

—— 小池さんは美術作家としての活動もされていますが、アートと福祉の活動や考え方に近いところは感じますか？

小池 私はもともと美術作家として活動するところから始めて、そこから障害者アートに興味を持って、仕事として障害者支援に関わるようになりました。今の仕事の世界に行ってもいいと思ったきっかけは、利用者さんの障害について考えることと、作品について考えることは似ているなと気づいたからなんですね。その人が社会の中で「居ていいんだよ」という場所だったり、周りと関わっていく方法だったりを見つけてあげることが支援というならば、例えば美術の文脈の中でこういう意味があるからこういう作品があるんですって説明することと似ているなと。

高橋 それは支援現場で働く中で実感していったことなんでしょうか。

小池 最初は作家活動とそれを経済的に支えるための副業みたいな感じで、支援の仕事は分けて考えていたんですけど、今はもう一緒というか、ある意味、支援のほうが私の中での表現活動になっている部分があります。それに、展覧会で作品を発表して社会に関わっているようでも、見る人が限定された特殊な状況とも言えるし、施設も施設の中だけでやってきて、なんでこんな閉ざされてるんだって感じることがあります。そういう意味で、開かれた施設や障害を持った人と関わる社会について考えるようになったし、多くの人に障害者福祉の仕事についての理解が深まって欲しいです。私たちの日常と置き換えて想像してみたり、もっと関わりが増えたりすればわかりやすいのという思いがあります。そう考えたときに、社会とのアクセシビリティをどうしたらいいかということ、TURNを通じて何か方法を見つければいいかなと、TURNを通じて何か方法を見つければいいかなと、自分の今いる場所から発信できるようになるかもしれないし、伝えられたらいいなって思っているところです。

前田 アクセシビリティという言葉でいうと、私も使い慣れているものではないですし、まだ社会全体に浸透している

言葉や概念ではないのかなとは思いますが。ただ、今回の「アクセシビリティ」のエリアにあった「アルテック」の機器のようなものも、普段のいろんな場所でも少しずつ増えている段階なのかなと感じることはあります。それから、私自身は福祉の現場とのつながりが基本的にはなかったのですが、TURNフェスのような場に行くと、それこそがおかしいのではないかと思います。今は個人的な活動として、障害をお持ちの方と健常の方が一緒に集まってワークショップなどをする横浜市の事業に参加しています。そこに行くと、最初はコミュニケーションに障害を感じたりするんですけど、ずっと関わり続けていくと徐々に解きほぐされていく感覚があります。例えば、面白いのは聴覚障害がある方と話すときに、皆さんボディランゲージが普通に出てくるんですね。誰かに教えられたわけではなく、わかりやすくコミュニケーションしようとする能力が備わってるんだなと。まさに高橋さんがおっしゃった、人間本来の力を取り戻していくことが、普通の日常のやり取りの中でもできるんだと感じています。

高橋 たしかに、勝手にボディランゲージが出てきてしまうのには自分でもハッとしましたね。自然に出るのがすごく面白いなと思います。もしかしたら、そのための導線づくりみたいなものがアクセシビリティなのかなと、今聞いていて思いました。

前田 そうですね。持っていらっしゃる障害や生きづらさは本当に多様なので、それを簡単にブレイクスルーできるとは言いませんが、まずはどんどん出会って、知り合っていくという機会を社会の中で増していけば、もっといろんなことを変えていけるのかなと。

高橋 自分はアクセシビリティって一体何だろうと考えたときに、「変身」だと思ったんです。山城さんと伊藤さんのトークでもこれがテーマになっていましたが、伊藤さんの研究テーマが、他人の身体を想像してその人になった気持ちで世界の認知の仕方を理解していくことをされていて、それがたぶんアクセシビリティの前提にあるんじゃないかなと僕は思います。先ほど小池さんがおっしゃられた、「その人の層で世界を見る」というのも同じだと思うんですけど、例えば、伊藤さんの話で面白かったのは、先天盲の視覚障害者の方と小鉢が多いタイプの定食を食べていて、目が見えない

のにそれぞれの小鉢を行き来して器用に食べられていることに驚いたそうなんです。伊藤さんとその方が話し合った結果、その方のそれぞれの小鉢の認識イメージは、健常者の人にとってパソコンのデスクトップ上のフォルダをクリックして開いていく感覚に近いということだったんです。つまり、それぞれの小鉢に触って口に運ぶことで、初めてその中の情報が何だったかがわかると。

小池 面白いですね。逆に私たちは全体が見えているから、そういう把握の仕方ができない。

高橋 そうなんです。でも話を聞くと、なんとなくそういう状況なんだってわかりますよね。これを知ってることは、たぶんこれから僕が視覚障害者の人と何かをするときに、とても役に立つと思うんです。こういう感覚なんだなっていう、共通言語みたいなものを持てるから。

前田 それを自分の中に身体化させて、変身するんですね。

高橋 そう、自分にインストールすれば、世界の認識の仕方が変わっていくんです。だから、アクセシビリティって、誰かの身体を考えることなんですよ。相手と何かしたいときにどうやったらできるかを、まずはその人に変身しないとわからないことっていっぱいあるんじゃないかなって思っています。とは言いながら、僕は現場の経験が全然ないので、障害者の方と会ったりする機会がもっとほしいですね。

小池 皆さん、ぜひ私が働く施設にいらしてください。TURNフェスの現場だけでなく、サポーターの間でもアクセシビリティをもっと増やしていきたいですね。

[2018年1月14日(日) 3331 Arts Chiyoda「アーツカウンシル東京 ROOM302」にて収録]

* アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)の人材育成事業として実施しているTokyo Art Research Lab(TARL)。アートプロジェクトを担う全ての人々に開かれ、共に作り上げる学びのプログラムとして、人材の育成、現場の課題に応じたスキルの開発、資料の提供やアーカイブなどを通じ、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指している。

会場のアクセシビリティをコーディネート

NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

TURNの初年度よりアクセシビリティサービスの企画とサポートをしているNPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク(TA-net)は、これまでの経験をもとに「どのようなサポートがあると、TURNフェス3を楽しむことができるか」を準備段階から主催者とともに考え、実施できるようコーディネートした。会場内での手話通訳の配置、トークイベント実施時の文字支援を充実させることをはじめ、刻々と変化する会場での柔軟な対応でTURNフェスでのアクセシビリティの側面を向上させた。



トークプログラムでの手話通訳とUDトークを利用した文字支援



UDトークが音声認識したテキストの細かい修正はその場で行われる

欠落は新しい能力の扉を開いてくれる

馬場正尊

僕はかなり小さな頃から緑内障で、それが進行し現在では重度の視覚障害になっている。年々、ちょっとした見えないものが増えて、今では活字はもう読めていない。この原稿も音声認識とタブレット端末で文字を超拡大しながら書いている。建築設計が基本的な仕事なので、ずっと隠してたけど、それも限界で最近、カミングアウトした。

そのことをなぜかTURNのプロジェクトディレクターの森司さんや監修者の日比野克彦さんには、何年も前から伝えていた。そんなことは気にも留めず、普通に受け入れてくれると感じていたからだと思う。

そんなわけで今回TURNフェス3に誘ってもらった。この展覧会が障害を持つアーティストとしてのデビュー、ということになるだろうか。

《知覚のライン》と名付けた作品は、指先の触覚でさまざまな展示内容のメッセージを感じることができる、新しいサインシステムのようなものだ。展示会場の壁全体を幅5センチの一筆書きラインで繋ぎ、そこに点字の説明や、作品からインスピレーションを受けた素材を貼り付けた。そのラインを指先でなぞることで、表現の質感を感じられる。

現代芸術活動チーム【目】の荒神さんが、視覚と聴覚を完全に遮断して空間を体験するときに、《知覚のライン》を手がかりにしてくれていたのが、なんだかとても嬉しかった。

僕の他にも、障害がある多くの人たちが、表現者として参加していた。うまく言えないのだけど、それらは何らかの障害によって、何らかの感覚や能力が進化し、それによってもたらされた表現だった。欠落が欠落ではなく、新しい感覚や能力の扉を開く。僕たちはそのバランスのなかに存在しているだけだ。

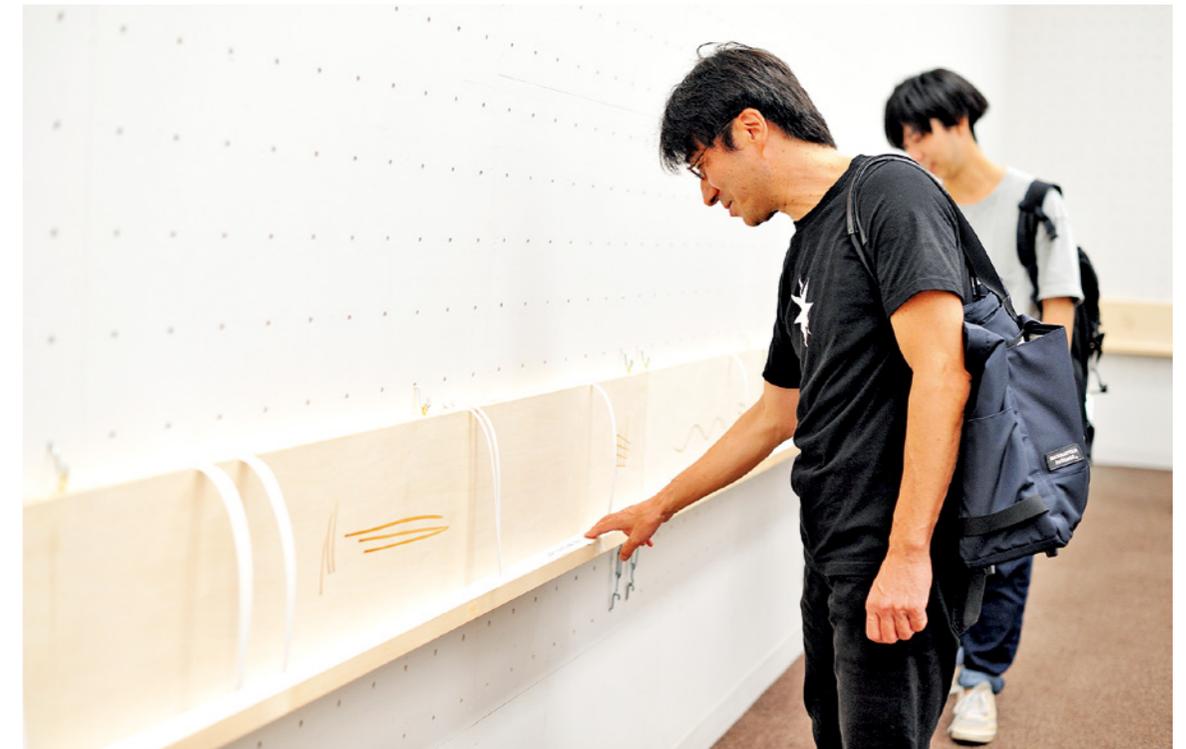
実は最近、僕はちょっと不思議な感覚の中にいる。視覚障害が進むにつれ、触覚や聴覚、人の話を聞く能力が進化している。メモが取れず、声や音を頭の中で立体的に組み合わせて記憶するようになってから、物事の全体像が把握しやすくなっている。うまく伝えられない感覚なのだけど。

印象に残った打ち上げ風景を書いておきたい。そこには多種多様な障害を持った人々がいた。普通に考えると何らかの欠落を抱えている人々、ということになると思う。でも、流れている空気には欠落感の欠片もなかった。それらをごく自然に補い合っている優しさや、欠落に対する圧倒的な寛容さ。その空間の中で、僕自身はどうでもいい存在であってよくて、あらゆることを許してくれる安心感で満ちていた気がする。初めての感覚だった。

宴会が終わりに近づく頃、身体のほとんどの部分が不自由で車椅子に乗った赤い髪のユウタが、何やら自分のカバンの中から取り出してほしいとジェスチャー

した。そこにはスピーカーと小さなアンプのようなものが入っていて、タブレット端末とそれを繋げて欲しいと仕草で示していた。プラグを接続すると突然、クラブミュージックが大音量で鳴り出す。ユウタは、かろうじて動く指先だけでDJを始めた。いつの間にかみんなが踊りだし、チープな中華料理屋はクラブに変わった。耳が聞こえないはずの人も、なんだかめちゃくちゃリズムに乗っている。ユウタは指先だけで、た

くさんの人たちの身体を動かしていた。あまりのDJテクニックに、「どうなってるのか」と尋ねると、「再来週は、アムステルダムで回す」とたぶん言ったと思う。言葉にも障害があるからうまく聞き取れなかったが、どうやら彼はかなりのDJのようだ。その風景の中にいた僕は、なんだか涙が止まらなかった。でもそれが何の涙なのか、よくわからなかった。



《知覚のライン》に触れながら会場をまわる馬場正尊

2

エキシビション & パフォーマンス

TURNの交流プログラムの成果を発表する場としての側面が強かったこれまでのフェスと異なり、フェス3では、さまざまな形式のプレゼンテーションが行われた。

3年間の交流プログラムで育ててきた関係性の上で実現した企画を記録したり、交流先の施設で行われているワークショップをそのままフェスの場に持ち込んだりするなど、より深化した交流の成果を発表する作品がある一方で、TURNと親和性のあるプロジェクトや展覧会をフェスの場で紹介したり、構想中の新しいプロジェクトに向けてのキックオフの場としてフェスを活用したりするなど、新しいフェスの関わり方があった。また、フェスティバルらしい祝祭的な空間のなかでオーラル・コミュニケーション以外の関与を促すパフォーマンスや、フェス3のテーマであるアクセシビリティを取り込んだパフォーマンスなど、アーティストごとに異なるアプローチによる多彩な表現が展開された。

学生の価値観を広げる公開授業 山縣良和とこののがっこうとしょうぶ学園



「こののがっこう」というファッションスクールを主宰するファッションデザイナーであり、アーティストの山縣良和にとって、鹿児島県のしょうぶ学園との出会いは大きな転機となったという。TURNの交流プログラムの中では、実際にこののがっこうの学生としょうぶ学園を訪れ、現地で授業やワークショップを実施した。その経験をもとに、フェス3では、しょうぶ学園の利用者が制作した140点にも及ぶ作品（絵画、陶芸、刺繍など）と、こののがっこうの学生や卒業生の作品を同空間に混在させて展示し、一般的に健常者と呼ばれている人たちが制作するものと、障害者と呼ばれている人たちが制作するものの曖昧さを浮き彫りにすることを試みた。また会期中は、1日かりの講評会を2日間にわたり実施。こののがっこうの学生たちが、自身が制作した作品をプレゼンテーションし、日比野をはじめ外部からの複数のゲスト講師たちが指摘やコメントを述べながら、「表現すること」やファッションに対する本質的な問いも含めた議論を行い、互いの知見を共有する場となった。



僕が初めてしょうぶ学園に伺い、僕の作品を福森園長にお見せした際、「君もじゃないか!」と言われたのを覚えています。こののがっこうの学生の作品から、そしてしょうぶ学園の利用者の皆さんの作品から、共通する“なにか”を感じることがあります。

どのような人も、何らかの障害を持ち、また内なる所に大きな創造性の可能性を持ち得ているのではないかと。根本では、健常者と障害を持った方に大きな違いはないのでは？
現代の社会において、“違い”とされているのは一体何なのか？ファッションを学ぶ僕らが、彼らから何を学び、また何を未来に創り出し、表現できるのか？という問いから、そのようなことを学生と共に考えるきっかけ作りとなる企画を考えました。

——山縣良和
TURN 公式ウェブサイト「タイムライン」
2017.9.11『学びの天命反転地点』より



僕の中には決して、答えのようなものはありません。

一番の目的は、授業を東京都美術館で行うにあたり、心や身体表現に最も近いとされるファッションデザインを勉強するこのがっこうの学生に、デザインプロセスの段階で、一般的に障害者と言われている方の作品や視点、クリエイションに触れ、さらなる世界、価値観を広げてもらいたいということです。

今回は、特にファッションのアウトサイドとされがちな、彼らの視点をこのがっこうの受講生に感じてもらうために、講評会のゲストの方も、そのような広い視点を持っている方々にお願いしました。

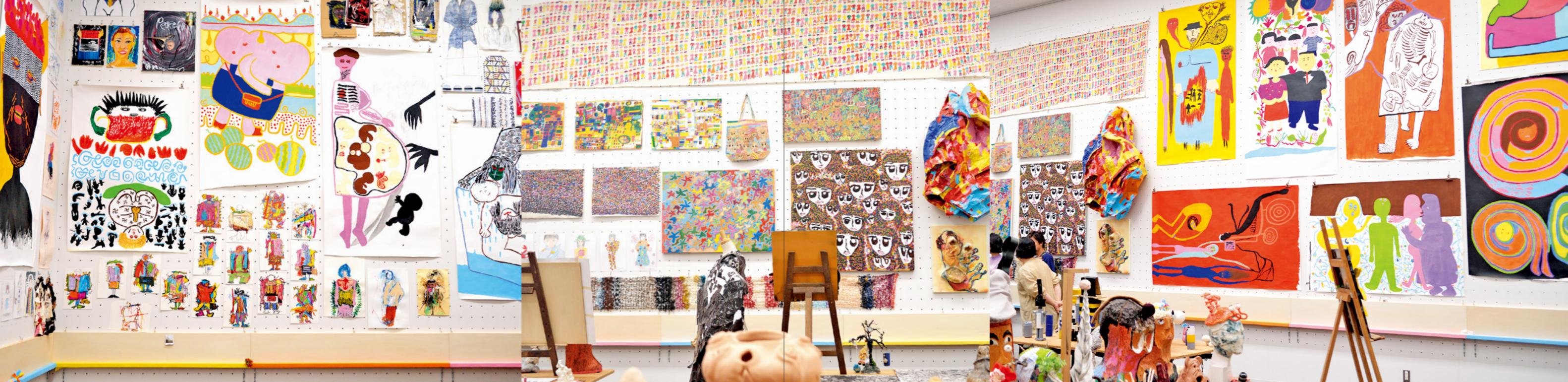
あくまで“装い”を軸にしながらも、さまざまなコミュニケーションが生まれ、視点が混ざり合いながら、時に価値観が逆さまになるような空間性、入口も出口もアチラコチラにさまざまあるような価値観が浮遊した状態のような感覚になる時間になりました。この感覚を味わうことこそが、学びに最も大切なことなのではないでしょうか？

—— 山縣良和
TURN 公式ウェブサイト「タイムライン」
2017.9.11「学びの天命反転地点」より



COCONOGACCO EXHIBITORS

KANA OHASHI	SAKURA TANO
AYA TSUBEMI	YUKI TAMAI
TAKU TAKEMU	YUKI HIRAI
CHIKARU EGAMI	MAE ISHIDA
KIKO KUMASAKA	KENGO KAWA
EMI KOTAMA	RITA HIRAI
Fuko Sada	CHIKAKAWA
HIROKO HASEGAWA	YUJI
AVZJI Yoshimoto	TWENA
RYO OIKAWA	Tina Saito
MAYU YAMAHAKU	MUTSUMI WAKAYAMA
KOUKI SAITO	KEISUKE YOSHIDA
Reipall: pomykai	KOYA SHIMIZU
ANNA KOTAJA	DAISUKE SENOYA
YUKI FASATO	NORIKO MURATA
WATANABE MIKU	CHIKATAMA
KIKUNAGA KAORI	SUICHI MIKI
YASUHIRO ANNOU	BIRO MAN
FUMIKA FUJWARA	YUKI KAWA
YUMIKO HIROKAWA	YOSHIO HIRAI
	YOSHIO HIRAI



このがっこう 李知恩/石田萌/伊豆尚晃/江上千晴/生川遼/大石陸人/大橋佳奈/河野謙吾/菊永佳織/熊坂佳子/小嶋杏奈/小山恵未/斎藤雪香/坂井紘平/清水利江子/竹内淳子/玉木遥帆/常見彩耶/津野青嵐/都梅誠/土居賢哲/中西睦/長谷川博子/森麻衣/山白真結/吉本杏/渡辺未来/TWEA/Tien Su Yu Cindy/(以下卒業生) 案納泰裕/高謝曉楠/斎藤幸樹/佐藤友宏/志村大輔/中里周子/HSUEH CHI LING

東伸宏/弘中裕美子/藤原史加/増田知也/村上亮太・千明/森龍一/山崎拓哉/吉田圭佑 しょうぶ学園 塩津ひとみ/溝口ゆかり/中原アサエ/緒方江津子/藤村直樹/森節子/米徳万里子/今村哲也/神村八千代/池山麻智子/吉信ハツミ/大田智子/有村アイ子/高田幸恵/大島智美/記富久/米山宜秀/鶴木二三子/村田夏子/上妻裕一/郡山義一/隈谷端/有川るり子/関直継/濱田幹雄/福山聖悟/中田麻美/翁長ノブ子

「まっしろな絵本」を考える

山城大督

映像を主体に活動をしているアーティストの山城大督が、「五感を再考し、感覚から学び、知覚をひらく」ためのプロジェクト《センサリーメディアラボラトリー (SML)》をスタート。フェス3では、その第1弾として企画された「まっしろな絵本」についてのプレゼンテーション展示を行った。期間中には、リサーチで出会ったNPO法人てんやく絵本ふれあい文庫代表で全盲の岩田美津子さん、視覚障害者の世界をアートの領域から研究する伊藤亜紗さん、点字を音と光で表現した《音点字》という作品を発表したアーティストの福森みかさんの3人とともにキックオフフォーラムを開催。それぞれの活動と今回のプロジェクト概要を紹介しながら、「まっしろな絵本」を作るとしたらというテーマを起点に、目の見えない人たちの世界の探求を通して、プロジェクトの可能性を語り合った。



岩田美津子さん(左)に展示内容を説明する山城大督



点字つき絵本・さわる絵本

出版社などによって製作された、予め点字が印刷された書店で流通する点字つき絵本の総称。2002年には、岩田さんの呼びかけにより、出版社、印刷会社、書店、点訳ボランティア、作家、画家、デザイナー、研究者などのメンバーによって構成される「点字つき絵本の出版と普及を考える会」が発足し、より良い形で点字つきの出版物が増えていくための活動を続けている。



てんやく絵本

一般に市販されている絵本の文章を塩化ビニール製の透明なシートに点訳し、原本の活字部分に貼付。また、同じシートで絵を形づくって貼りこんだり、説明文を点字で書き添えたりして、見える人と見えない人が、一緒に楽しめるように工夫した絵本のこと。一冊ごと手作りで、「てんやく絵本ふれあい文庫」が提供するマニュアルに沿って、ボランティアで製作されている。



《音点字》企画：福森みか 制作：遠藤孝則

視覚・聴覚・触覚を使って、視覚に障害のない人が点字を楽しく学ぶための装置。6つの穴のある盤にブロックを差し込み、形が点字の配列となったときにその文字の音が鳴り、配列のルールを光で表す。

どれだけ僕が想像しても、見えないという状態の世界を「完全に想像し切る」ことは無理だと思っています。それは別に視覚だけのことじゃなくて、誰かの悲しみや喜びを、自分が本当に完璧に得られるということってなかなかできない。でも、それを想像すること自体はできていると思っています。(山城)



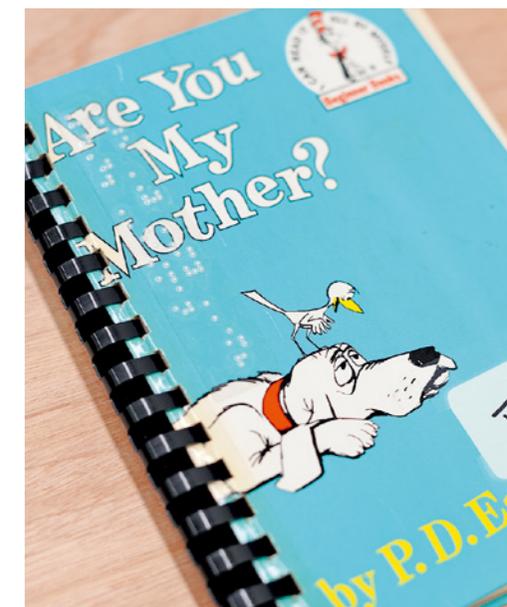
やっぱり見えなくたって、カワイイねとか、面白いねとか感じるんですよ。面白いねとか、犬だったら、尻尾がくるくる曲がって愛嬌があるねとか、そういう感じる力というのはやはり見えなくたって、絵本を読書していく中で身についていくし、想像する力もついていくと思います。(岩田)



僕が考えている絵本では、その本とおして、ページをめくりながらある情報を得ていくと、知覚が広がっていくということをやりたいと思っています。だからそれは、見える人も見えない人も体験できるものです。でも、どうしたらいいかはまだ分かってないんですけどね。(山城)



目の見える人たちは、一般的には、点字のついた絵本というと、見えない子供たちのための絵本だと想像するんです。親が見えないときも子供は絵本を読んでもらえないということには、なかなか気がつかれないんですね。(岩田)



「好きなもの」と向かいあう時間

高橋正浩と池田晶紀と川瀬一絵

写真家の池田晶紀、川瀬一絵と社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンターの3年目の交流は、同センター利用者の高橋正浩さんが高速道路の地図を描くのが好きということを知ったところから始まった。高速道路地図は工事のたびに更新されるため、高橋さんは、新しい地図をその都度取り寄せては、らくがき帳の紙に鉛筆とマジックで書き写していき、セロハンテープでつないでいく。そのため、とても長いものになるので、本人もすべてを広げきったことはなかった。そこで今回は、東京体育館を使って実際に広げてみる日を設け、さらにサービスエリアにも出かけてみるという交流プロセスを実施した。その様子を池田は60分のドキュメント映像作品に、川瀬は写真に収め、フェス3の会場で発表。会期中には高橋さんも来場し、実際の地図を床に広げ、持参したインスタントカメラでその様子を撮影する姿も見られた。



会場で上映された映像作品《ロードショー》



高速道路の地図を描き写す高橋正浩さん

見せたかった現場の風景

リサイクル洗びんセンターをはじめて訪れた時、そこで窓口として対応してくれたのはスタッフの黒澤さんという男性の方でした。ジャージ姿にジーパン、スニーカーといった出で立ちで、はずかしそうに笑いながら挨拶をしてくれました。ぼくは瞬間的に「この人となら絶対気が合う！」とすぐにわかりました。「肩の力を抜いて素直にお話ししますね。それから一緒にになにかつくりませんか?」といった前向きな態度で、彼の働く施設で多くの障害のある方々への思いや現実、彼の目指す目的や目標、日常のたのしいことや、深刻な問題など、今のこの現場にあることを出来るだけオープンにしてくれました。そこから間髪開けずに、ぼくらはまず働く方々のポートレイトを撮らせてもらいました。これが交流の「はじめまして」のごあいさつです。「にどめまして」以降はそれぞれの「好きなもの」をテーマにしたドキュメントをしていくプロセスで現在も制作と交流をセットで進めています。

写真家は人に会うことが仕事です。扉を叩いて中を覗いてみたら、オープンに人に会わせてくれた黒澤さんがいました。会ってみたら、こんな世界があつて、こんなドラマがあつて、こんなにおもしろい人で、といった感動は今も続いています。行くたびに思うことは、現場で一緒に働き、一番近くで見ている黒澤さんがぼくらに見せたかった光景っていうのがまずたくさんあつて、その想いにぼくらは素直に返していくのが、このプロジェクトでありドキュメンタリーの基本になっています。

池田晶紀



会ってみてわかったこと

障害のある方が働くリサイクル洗びんセンターへ訪問して、一個人として、「なんだ」と肩の力が抜けた2つの出来事のことを、書いておきたいと思います。

交流が始まる前まで、わたしは障害のある方と接することがほとんどなく、時々電車の中などで居合わせることがあっても、どういう態度でいいのかわからず、意識しないようにすることでその場をやり過ごしているようなところがありました。

リサイクル洗びんセンターを訪れることになったときは、きっと困惑してしまうであろう、自分の未熟さを目の当たりにするのが不安だったし、そんな自分の様子が失礼になるのではないかと心配していました。

リサイクル洗びんセンターの利用者さんたちは、突然の来客であるわたしに対し、あたりまえに緊張して、それでもカメラを向けているとサービス精神まんまんでポーズを決めたりしてくれました。そうして少しずつわたしの方の緊張がほぐれ、大きな機械が大音量で動く工場の中で働く姿や、休憩中に仲間同士でじゃれ合う姿をもう少しみていたくなり、翌日も訪問させてもらいました。

気さくに話しかけてくれる人、ぶいに行ってしまう人、言葉が聞き取りづらい人、ただにこにこしてくれる人。それぞれ困ったけど、困ったなりの反応を返すというコミュニケーションをするようになっていきました。

その日の帰り道のことです。最寄りの駅のホームに降りていくと、ホームの先で電車を待っている利用者さんの姿を見つけました。そのとき、「あ」と嬉しくなって、話しかけようとした自分がいました。それまでまちなかで障害のある人を見かけても、目を伏せてきたのに。

そこで、「なんだ」と思いました。「なんだ、知らなかっただけだったんだ」



知らない、ということだけで、変に構えてしまっていること、逃げてしまっていることがあります。例えば、ほんの数年前まで、まちなかで外国人の姿を見かけるとびっくりしたものです。それも今ではすっかり慣れ親しんでいるように、まずは、その「なんだ」を、共有していけたらいいんだと思いました。

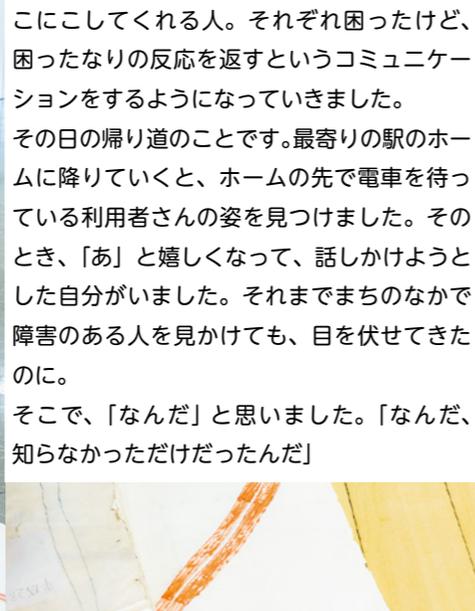
それから、もうひとつ。グループホームに遊びに行かせてもらうようになった頃のことです。何の目的で家までやって来ているのか謎であろうわたしの訪問に、利用者みなさんは、まるで子供の頃、知らない子供が家に遊びに来ることになったときみたいに、ちょっと緊張しつつ、ちょっと楽しみにしているといった無邪気で柔軟なノリで迎えてくださっていることに気がつきました。

そのとき、わたしは自分のたてまえや常識やつじつま、馴れ合い、そのあたりからの態度が肩すかしにあったみたいで、少し動揺してしまいました。

どんな作品をつくるのかも手探りの時期に、作品もプロジェクトも関係なくこうして迎えてくださっている。何かにかこつけなくてもその場に素直に反応できること。

本来当たり前にできるようで、社会の中で無意識のうちに抑制してしまっている、自由なたましいの在りようを垣間見たような気がしたのでした。

川瀬一絵





制作協力：社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンター、東京体育館

みんなが心地よく過ごせる舞台
富塚絵美とマダム ボンジュール・ジャンジ



アーティストの富塚絵美とドラッグクイーンのマダム ボンジュール・ジャンジは、しゃべってはいけないというルールのもとで、広場に見立てた空間に居合わせた者同士のコミュニケーションを創出する《光の広場》を構想した。そこでは、自分が希望する過ごし方を伝える鯛型のツール「鯛シール」を身体のどこかに貼って広場に佇むと、どこからともなく広場の常連（パフォーマー）たちがやってきて、手話や筆談、ジェスチャーを交えたコミュニケーションが展開された。また1日に2回、マダム ボンジュール・ジャンジが登場し、エルヴィス・プレスリーの「It's Now or Never」を手話でパフォーマンスし、会場を沸かせた。ろう者でLGBTでもある漫才師、路上生活経験者のダンスユニット「新人Hソケリッサ!」、手話通訳士、プレイバック・シアターを実践する人など、さまざまなバックグラウンドを持つパフォーマーが集まり多様性のある世界が作り出された。

《光の広場》に集まった常連たち

チョリと仲間たち

富塚絵美(チョリ)、渡邊梨恵子(リエコー)、
金田翔(カネショー)、林まりえ(マリエッティ)、
森下響(ビビ)、山田あさこ(あさこ)、
坂田有妃子(ゆきこ)

ジャンジと仲間たち

マダム ボンジュール・ジャンジ、モンキー高野、
らーちゃん、ミラン、あきちゃん

新人Hソケリッサ!

アオキ裕ギ、横内真人、小磯松美、伊藤春夫、
渡邊芳治、平川収一郎、西篤近 ほか

イミナイバンド

齋藤麻生(まお)、鶴沼ユカ、うえもとしほ、
ほか2人

サインネームコーナー

瀬戸口裕子(ジャスミン)、
Sasa Marie Hagiwara(マリー)

プレイバック・シアター

井上和享(かつくん)、べちゃん

応援メンバー

小清水暁士(きょーじ)、長谷川知広(ともさん)、
長谷川縁ノ助(えんくん)、萩原睦(ぶっちゃん)

音響/作曲 田中文久(ぶんちゃん)

照明協力 おじさんさんトリオ

美術協力 高橋裕子(ゆうこりん)、
大西香澄(かすみ)、さとえり

制作協力

UACJ 製箔・日本アルミニウム協会、
「ろうLGBTサポートブック」新設Cチーム企画、
ヤシマ、コミュニティセンター akta、
谷中のおかって



おすすめの過ごし方

- ① 入口付近の〈鯛シール〉に「したいこと」を書いて自分に貼る
- ② 中央にある磁石を使って「自分のお気に入りの場所」をその方角の壁に書き込む
- ③ サインネーム(手話での呼び名)をつけて、あの手この手で対話を試みる
- ④ プレイバック・シアターに参加してささやかな想いを演劇にする
- ⑤ ぼーっと広場の風景を眺める
- ⑥ ミッチーに手紙を書く



「美術館では、もともとおしゃべり禁止なんだけどね」と森さんが笑った。そう。でも、光の広場では口パクはOKだし、猿の真似してはしゃぐのだってOK。最初は慣れ親しんだコミュニケーション方法を奪われ、不自由さを感じるけれど、慣れてくるとなんだかとても居心地が良くなっていく。何かを奪われる「禁止」なのではなく、普段とはひと味違う新しい世界をみんなで体験するための「禁止」なのだ。居心地が良すぎて何時間ものんびり過ごす人もいれば、風景の異様さに目を背け見なかった事にして走り抜けていくような人もいる。ひたすらうたた寝をしている人もいれば、突然今まで何年間も溜め込んできた感情が抑えきれなくなり泣き叫ぶ人もいる。誰もいない時間もあれば、人で賑わって混雑し、人の隙間を縫って通り抜けるのがやっとの時もあった。広場にある時計台が見ている風景ってこんな感じなのかな、と思った。

そして、光の広場の鳩時計の鳥が舞う。マダム ボンジュール・ジャンジの口パクのパフォーマンスだ。曲はエルヴィスの歌う♪「It's Now or Never」。振り付けには手話が織り交ぜられていて、歌詞が聞き取れなくてもなんとなく見ていればニュアンスで話が理解できるようにもなっている。この特別な鳩時計は、時刻を知らせるのではなく一期一会の“今”の尊さを知らせてくれる。

—— 富塚絵美

TURN公式ウェブサイト「タイムライン」
2017.9.7「光の広場」より

ありのままで存在することの喜び

アオキ裕キ(新人Hソケリッサ!代表)

TURNには、開催初期よりトークなどの観客として何度か参加させていただき、2020年に向かってどのように展開して行くのか興味を持っていました。

そんな中、知人であった富塚絵美さんから「ソケリッサ!」へTURNフェス3参加の誘いをもらいました。「ソケリッサ!」は路上生活経験者で構成されたダンスグループで、メンバーの踊りがTURNの活動の需要となるありがたい機会でした。

僕は便利で安全な、いわゆる恵まれた環境の中で生活をし、生きることに日々意識を向けることなく過ごすことができます。踊りを通し身体に目を向ける中、この社会において、視覚、聴覚など、世界と自身を繋ぐ身体感覚群は、生命維持のために本来の機能を懸命に果たしているのかと疑問を持っています。

その経緯もあり、路上生活経験をした身体から生まれる踊りに興味を持ち、2007年より「新人Hソケリッサ!」という名称にて、路上生活者、路上生活経験者の参加者と集い踊るようになりました。住居やお金を失い、屋外生活を余儀なく送る路上生活の身体は、過酷な自然下において、日々生きることに向き合わざる得ない状況であり、メンバーの身体から生まれる踊りは、表面的なものに価値を見出していた僕の身体にはない、内側から溢れる強烈な人間のかたまりでした。そんなメンバーの身体に触れる中、原始時代の人間の姿、状況はどんなものだったのかと思い巡らすようにもなりました。

我々が参加した空間は、さまざまな環境下で生きてきた身体が一部屋に集い、自由に過ごすというものでした。会場はシンプルで特別な展示物もなく、紙やペンや机とクッションがあり、ときおりスピーカーから音

楽が流れるという、感覚的には広い居間のような空間。そこでの制約は「しゃべってはいけない」というだけでした。メンバーは当初、どう過ごして良いのか戸惑う者もいましたが、皆それぞれに過ごし始め、筆談で対話する者、壁際に寝転んで休む者、イベントに参加する者などそれぞれが、その空間でやってみたくなることを実践し始めていました。

今回参加したメンバーのうち二人は、現在も屋外で寝ている状況です。よし悪しなどではありませんが、家やプライドを手放した路上経験の身体は、一般的な生活を送る人よりも、見栄や恥ずかしさから逸脱した面を多く感じます。一人のメンバーは、「あなただけのために踊ります」と来る観客にことごとくアプローチを重ね、数分間にわたり個人へのダンスを提供していました。

また、あるメンバーは、定期的に鳴り出す音楽が始まるごとに滑稽に身体を動かし始め、その姿を見守っていた観客も徐々に参加を始め、たちまち大人数のサークルが生まれるという瞬間が多々ありました。メンバーは経験を積んだ芸術家ではないのですが、やらされているのではなく自ずとやりたいことを楽しんでいる姿は、TURNの空間に訪れる観客にとって、ありのままに存在することの喜びとともに、言葉交わさずとも人間味溢れる関係性が生まれていました。

自由とはまず制約があって、そこからの逸脱から意識をし、かたちとなるもの。その空間には自由と創造の始まりがありました。富塚さんのアプローチは、とても少ない制約の中に放り出され、そこで生まれる人間味に大きな焦点を当てた企画です。これは富塚さんが人を信頼しているからこそ生み出せる空間であると感じました。

「TURN(ターン)」は異なる背景を持った人々が関わり合い、様々な「個」の出会いと表現を生み出すアートプログラムです。

こちらはTURNの説明ですが、異なる背景を持った人々が関わり合う中で、生み出されるもの、そしてその先にあるのが愛なんだろうと感じる時間でした。個人が生きるために他人と出会い、そこで生まれるコミュニケーションの手段。必然な状況下で生まれた創造性にはリアルな強靭さがあり、表面的なものに留まらない生命の根源性を強く含むと想像します。

僕がこの世界に生まれたときには、既に世界は始まっていて、過去に確立されたコミュニケーション手段を社会に教え込まれて来ました。表面的な形式や型をな

れば、お金をもらうことも可能で、物質に価値をおいた現代では誰かの作った手段を覚えさえすればそれで良いというような感覚が蔓延しています。

TURNの創出するさまざまな条件を持った身体との出会い、そこで見える生きてきた環境や境遇の違いで存在する身体それぞれの要求にある差は、マニュアルでないリアルな人との関係性の構築を体感出来るものであり、それは現代社会の習慣に囚われた身体との強制的な出会いの場でありました。

競うことに価値を置くものでもなく、さまざまな身体にある価値を見出すスタンスは、真の身体の祭典に繋がる要素であると僕は感じます。

これからのTURN、2020年に向け一層の展開を楽しみにしています。



紙に書いた言葉を掲げてダンスの指導をするアオキ裕キ

生きづらさを問い直す 滝沢達史

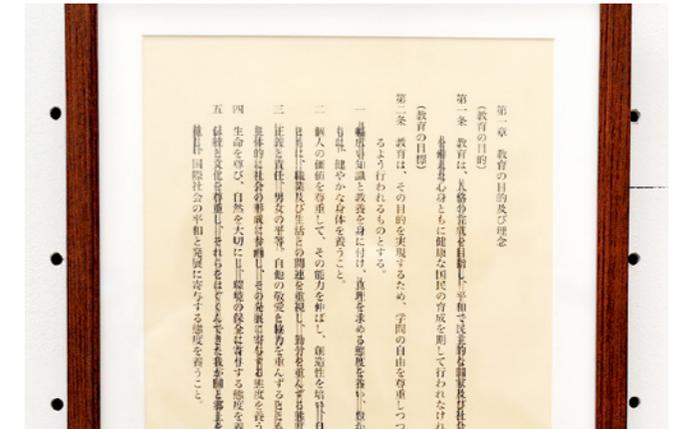
初めてTURNに参加したアーティストの滝沢達史は、2016年にアート前橋で開催された企画展「表現の森 協働としてのアート」で発表した展示を発展させるかたちで紹介した。同展は、アーティストが群馬県内の福祉、教育、医療の各現場へ入り、関わることを試みたプロジェクトを展覧会として発表するというもので、滝沢は、不登校・ひきこもりを支援するフリースペースのNPO法人ぐんま若者応援ネット「アリスの広場」と交流を行った。展示スペースに設けられたベッドや卓球台は、アリスの広場に通う人たちを知るための象徴的な存在だという。その展示スペースでは、TURN プロジェクトメンバーが思い思いに過ごすことでまた新たな光景を生み、さらにアート前橋館長の住友文彦さんと日比野との対談や、今井さつきとシューレ大学との合同企画のトークの開催にもつながった。滝沢の参加は、「表現の森」展の作品紹介という域を越え、TURNフェス3のさまざまな場面で、橋渡し役として機能した。



アート前橋の企画展「表現の森」に出品した滝沢の作品をTURNフェス3 会場で再構成し展示



《卓球》アリスの広場の象徴としての卓球台では、自然とコミュニケーションが生まれる。



《教育基本法 法律改正の提案》文言は美しく理想的であるが、現状からは程遠い幻想にも思える教育基本法を改正するささやかな提案。



《アリスの日記》「表現の森」の展示ができあがるまでの2016年3月～7月の記録。これ以降もアリスの広場との交流は続いている。



《Yさん》ヘッドフォンからは、ボランティアスタッフYさんが自ら語るひきこもり体験のインタビューが聞こえてくる。

1日目

搬入中は殺風景だった会場がオープンすると一気にゴチャットした。隣ではシューレ大学の若者たちが目を輝かせながらミーティングをしており、反対側ではドラッグクイーンがダンスを踊っている。僕はといえば、卓球の球を拾いながら、アルゼンチンから来た記者にひきこもりの話をしている。アリスの広場からは施設長佐藤さん、ボランティア、ママさん軍団。スカスカだった空間が人で充満している。こんなに作品を持って来なくてもよかったのではないか、と思った。



2日目

かねてからの用事があり、この日は休みをもらった。アリスの施設長佐藤さんが1日中会場にいてくれて、Yさんも群馬から足を運んでくれた。佐藤さんはもう一泊すれば良かったと言っていた。自分がいなくても、アリスの広場が生き生きとTURNの会場にいる様子を聞いて嬉しくなった。そういうのが目標かもしれない。



—— 滝沢達史

TURN公式ウェブサイト「タイムライン」
2017.8.20「TURNフェスの三日間日記」より



学びの場を語り合う 今井さつきとシュレー大学

交流プログラムを始めて3年目となるアーティストの今井さつきとシュレー大学は、今年度シュレー大学にとって一大イベントとなった、「APDEC (アジア・太平洋フリースクール大会)」の開催に焦点を当て、そこから「学び」について考えるアーカイブ展示とトークイベントを開催した。会期中は、今井だけでなくシュレー大学の学生もほぼ終日滞在し、さまざまな視点からAPDECを振り返るとともに、参加したシュレー大学の学生にとっての「学びとはなにか？」についての回答を壁に直接掲示し、ともに考える場が生み出された。



2017年8月1日(火)～5日(土)

～会場～

国立オリンピック記念青少年総合センター
(東京都渋谷区)

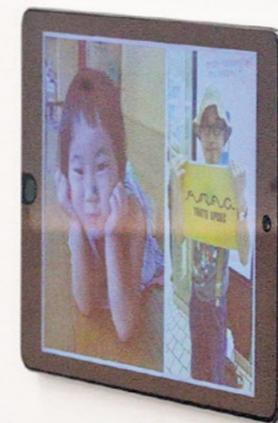
～参加国～

日本、韓国、台湾、香港、オーストラリア、
インド、インドネシア、フィリピン、マレー
シア、中国、イスラエル、イギリス、ドイツ、
スイス、アメリカ

IDECからの歴史

IDEC (International Democratic
Education Conference) ・世界フリース
クール大会

IDECは年に1回世界のどこかで開催され
るデモクラティック教育関係者の大会です。
この大会がデモクラティック教育の世界に
な普及に大きな役割を



APDEC

APDECとは

APDEC (Asia-Pacific Democratic Education Conference) アジア太平洋フリースクール大会 アジア太平洋地域のフリースクールの子ども、OBOG、スタッフ親、関心のある学生が年に1度集まる大会です。



学ぶということ、生きるということ — シューレ大学の学生・OBOGが考える「学び」—

春尾花野(かやちゃん)

私にとって学びとは生きることです。私は私が学びたいように体も心も動いてくれません。私にとっての学びは、テストで点を取ることもなければ、誰かに褒められるためのものでもない。私の学びは私の関心を大事にし、知りたいことを知っていくことであり、私の世界が広がって行くことではないかと今の私は思っています。そして、一人で学ぶだけでなく、人と学ぶことで、私は助けられ、私の世界が広がっている気がします。

奥野準(じゅんくん)

シューレ大学で学んでいること、どういう学びをしているのか、大きく感じられるのは、自分の気持ちを考える、ということを感じたのが、大きなことだった。シューレ大学では、ちょっとずつだが、今の自分の思いとか、やりたいこととかを、他の人の影響を受けることで、自分の考えを整理できるようになってきたのが大きな学びだったと思う。

今井さつき

永井岳(たけしくん)

以前は、世の中に合わせて生きるしかないと思っていました。いろんなバイト、仕事をしていたとき、自分を殺して、その場の価値観や上司に合わせて生きるしかない、と思っていた。自分は劣った人間で、死ぬほど働く、そのままでは人を殺すのでは、自殺するのでは、と思ったことも何度もあった。シューレ大学の学びというのは、学ばなければならないことではなく、学びたいことを学ぶことだ、ということ。その先に、働きたいように働き、生きたいように生きる。あなたと私の生きたいように生きる、をつくることがあると思う。

荻野鉄夫(まるちゃん)

学びは自分を築く一つ的手段ではないだろうかと思う。〈自分が「自分」として生まれたから〉というだけのことでなく、その自分とはなにかということが、学びのなかに転がっている気がする。それは、私が生きる「世界」というものを手にとって、見て、その姿形を知っていくということ。そしてその「世界」というものは、次の瞬間にはもう別の姿に変わっていくようなものかもしれない。世界を捉えているのがそれぞれの人の、「私の目」なら、瞬きの後に見える物の変化に戸惑ったり、嬉しかったりするのではないだろうか。学びとは、視野を広げることであり、自分と世界をつなぐものであり、自分を取り戻すものでもであると、私は思う。

山本菜々子(ななちゃん)

以前は知るとか表現するとかいうことは、どう人を蹴落とすのかという世界だと感じていた。シューレ大学では、全然違う経験をした。自分が何かを知らうとする中で、相手のことも知らうとしてきた。それまで人の中で生きていくことが大変なことだったが、人と一緒に生きていくことの喜びも知った。共存、生き合っていきたいということが表現になった。

学びをつくる

坂本ゆい(ゆいちゃん)

私はシューレ大学でデモクラティックに学んできたと思う。だから、私は今、料理教室でデモクラティックに教えようとしている。あなたはどうか、何に困っているのか、どうなりたいたのか、というものを聞いて、相談して、進めていきます。健康というのは、みんなが目指す健康体を目指すのではなく、あなたが今より心地よくなるのか、生きやすくなるのか、考える。そういう意味での健康をつくるということをやっている。



TURN的な瞬間を求めて らくだスタジオ

TURNの1年目から記録撮影を行ってきた、らくだスタジオの田村大は、いくつかの交流プログラムに密着し、時間を共有していく中で、「TURN的なもの」を感じるとともに、アーティスト・施設利用者と撮影者との間に、単に「撮る・撮られる」以上の関係性が生まれつつあるのではないかと考えた。その結果、3年目からは、自身の活動の中心でもある映画製作としてTURNの活動を追い、複数年かけて取り組むことになった。フェス3では、その映画の一端を披露するべく、TURNフェスやTURNフェス2、交流プログラムの一部（TURN参加アーティストの大西健太郎、角銅真実、James Jackの交流の様子）をまとめた映像《TURN One to three》を上映した。



TURNの映画について

2016年3月、最初のTURNフェス。記録撮影として赴いたその場所で、自己嫌悪にも似た居心地の悪さを感じたことを覚えています。ある施設の「内側」に、まったく異なる文化的背景を持った他者（アーティスト）が「外側」から入り込み、長い時間をかけて進行していく「TURN交流プログラム」。その「内側」で行われていた交流の様子が「外側」に向けて発信された最初の場。そこで自分が経験したのは、提示された様々な「内側」の断片にとまどい、どれだけカメラを通して（あるいは通さずに）見つめてみても、その「内側」が見通せず、どこにも自分の居場所が見出せない、そんな息苦しさだったように思います。そこで提示されていた「内側」の断片は、それぞれの形をとりながら、それぞれのもはとでも力強く説得力があるものでしたが、その断片の先の「内側」にあるものを見通すことが自分にはできませんでした（もちろん、それは単に自分の感受性や対話力の不足によるところもあると思います）。そんな心持ちで行った撮影のためか、いざ編集するという段階では大いに行き詰まってしまう、最終的に自分が頼ったのは映像ではなく「言葉」でした。

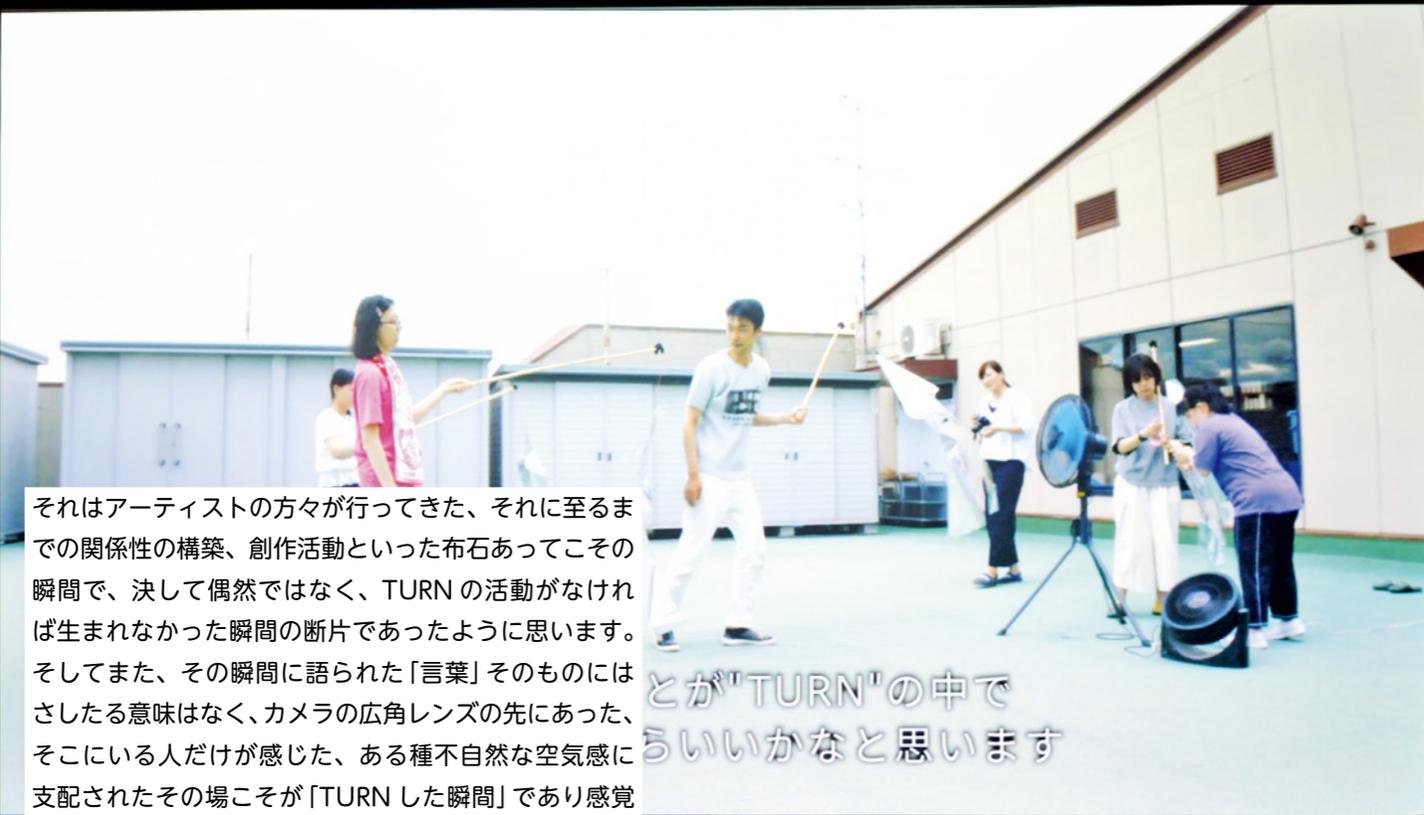
「TURNとはなにか？」

映像の作り手として「言葉」に頼りすぎることに對する屈辱感とともに、TURNというプロジェクトそのものが、その活動の壮大さ故に「TURNとはなにか？」という言葉の説明が先行してしまいがちになっているという、わだかまりのようなものを抱いたまま、自分とTURNの最初の関わりは終わりました。

そのわだかまりのような気持ちは次年度、次々年度に交流プログラムの現場、つまり「内側」に撮影という形で入り込むことで、徐々に変化していったように思います。フェスにおいて言葉による説明を試みた「TURN」というワードが、交流プログラムの現場では「こういうことなのかもしれない」と感覚的に、ずっと胸に溶け込むような瞬間、断片が何度もありました（それを今、こうして「言葉」に書き起こすことにとっても違和感を覚えます）。

例えば大田区立障がい者総合サポートセンターにおけるTURNフェス前の活動最終日に、利用者の方々が角銅真実さんや自分の思惑を外れる形で自らカメラの前に立ち「なにか」を語り出した瞬間。あるいは大西健太郎さんと板橋区立小茂根福祉園の利用者さんが、場を支配した不自然な空気に抗うかのように全身で対話を模索するやりとりは、どきりとするような、ぞっとするような、なんとも形容しがたいものを感じました。

人と人の繋がりとか 興味という風
交流されてるのかなという風



それはアーティストの方々が行ってきた、それに至るまでの関係性の構築、創作活動といった布石あってこそこの瞬間で、決して偶然ではなく、TURNの活動がなければ生まれなかった瞬間の断片であったように思います。そしてまた、その瞬間に語られた「言葉」そのものにはさしたる意味はなく、カメラの広角レンズの先にあった、そこにいる人だけが感じた、ある種不自然な空気感に支配されたその場こそが「TURNした瞬間」であり感覚だったように思います。

自分はアーティストの方々の案内により、幸運にも「内側」に入り込むことでそれを体験できました。しかし、ある「内側」において断片的に現れるその「TURNした瞬間」なるものは、その場にいればそれを感覚的に納得することは難しくはないように思うのですが、「内側」を経験した他者を介して発せられる断片から、その感覚を得ることはとても難しいように思います。その手段として映像、映画は瞬間を切り取り、提示することができるという点で相性が良いのかもしれません。それがこのプロジェクトにおいて、自分が「映画」という言葉を発した一つの理由であることに間違いはありません。では、なぜ「映像」ではなく「映画」という言葉を使っているのかというと、その理由は自分でもうまく説明できません。それはとても「感覚的」なものであり、自分にとって「映画」といったほうがしっくりくるという程度の思いだけなのかもしれません。同時に自分が「感覚的」に定義している「映画」というものは、同じく「感覚的」に経験した「TURN」と、似ているとも思うのです。

とが"TURN"の中で
るいいかなと思います



そんな感覚的なものでしか動いていない自分ですから、現時点で「映画」がどのような形になるのかを言葉で語る術を持ちません。そもそも、自分がそうであったように、映像で「内側」を見るよりも、直接「内側」へ来ていただくことが「TURN的な瞬間」という言葉に納得していただくのにてっとり早いのかもかもしれません。しかし、その「内側」に来ていただくように案内する術は自分にはありませんし、それがどれほど難しいことかは、このTURNというプロジェクトそのものの困難さと同義であると思います。

自分が行うべきは、アーティストの方々が作り出した「内側」を紹介するというよりは、アーティストの方々がTURN的な瞬間が起こるその場に自分を案内してくださったように、自分が「外側」の他者を案内できるような「内側」を新たに作り出すことなのかもしれません。TURNフェス3において用意していただいたような、パーティションで区切られた上映スペース、あるいは映画館の「内側」で、自分が感覚的に得た「TURN的な瞬間」が映像と視聴者の間で生まれてくれるのであれば、自分はそれを「映画」と呼ぶことができます。自分がこれから作ろうとしているのは、そういう「映画」なのかもしれません。

田村 大



心と身体が宙を舞う 大西健太郎と板橋区立小茂根福祉園

薄いフィルムを人型のような形に切り抜き、竿に取り付け、宙にかざして歩く道具「みーらいらい」を用いて2年目の交流プログラムを行ったアーティストの大西健太郎と板橋区立小茂根福祉園。彼らは、交流の中で行ってきた活動を会場にそのまま持ち込み、来場者が、みーらいらいで風を感じる参加型パフォーマンスを展開した。小茂根福祉園の利用者だけでなく、大田区立障がい者総合サポートセンターが主催する「たまりば」や浜松のクリエイティブサポートレッツの利用者など、別の交流先施設に通う利用者たちが積極的に参加する姿も見られた。

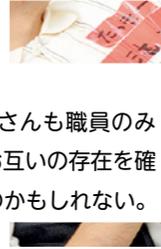


シートに横たわった身体のラインのふちどりを、ポーズを変えて何度か重ねることで、みーらいらいの独特の形が生まれていく

大西健太郎「TURN 交流記録」より

2017.5.10

フィルムシートの上に横たわると、みなさんとてもはしゃいでくれる！ フィルムの上になる人は、車椅子から降り、フィルムの上に横たわり、ポーズを作る……。一連のプロセスの中で、いろんな人に身体を持ち上げられたり、向きや角度を変えることになる。そして、その都度、皮膚に触れる面や身体に感じる重力が変化する。みなさんの反応を受け、このプロセスがそれぞれにとって未だ感じたことのない、新鮮な体験となってほしいと思う。



2017.5.31

「待つ」ということは、利用者さんも職員のみなさんもいつもやっている。お互いの存在を確かめ合うような振る舞い、なのかもしれない。



2017.5.31

嬉しいときや面白いときに、そのことを表情や声に出して表してくれる人もいれば、こちらからそれがわからない人もいます。でも、作業をするとわかる。手の動かし方や体の運びを通して、今彼の中に渦巻いているものが感じられる。すると、僕も彼も呼吸に合わせて作業や行為で返す。まさに、息を合わせる感じだ。



2017.6.7

「同じ作業の持続」という懸念をしていたが、作業の種類によっては、むしろその作業を延々繰り返す人もいた。そして、その行為はまったく「同じ」ことに見えなかったということ。いや、言い換えが重なるようだが、行為する身体の見ただけではなく、興味やこだわりみたいなものの振幅も「同じ」ところの行ったり来たり。徹底的に同じことを反復しているようにも感じた。これまで自分にとって、興味やこだわりと呼ぶものは、ある変化を伴っていくものだと思っていた。が、この光景を目の当たりにしたとき、変化しない興味があってもいいんだという気分になった。なぜなら、目の前でゆっくりとみーらいらいを振り続ける彼の表情に一点の曇りもなかったからだ。

2017.7.26

全員バラバラなことをしているが、不思議な一体感があつた。みんなバラバラにしている、という一体感(?) だろうか。



風くらげ(影の軌跡)から風あるき(宙に登る)へ

高田紀子(板橋区立小茂根福祉園生活支援員)

私たちは、人が小茂根福祉園(以下、小茂根)に来るのを日々楽しみにしています。大西さんもその一人です。大西さんは、いつも笑顔で皆に声をかけてくれます。新しいこと、よくわからないことも、ゆっくり丁寧に説明してくれます。見たこともない道具や、大きなカメラは、彼ら(利用者)にとって新鮮で怖くてドキドキするもの、それも全て大西さんが丁寧に説明してくれます。だから彼らは、リラックスして思いのままに動き、太陽のような笑顔をするのです。「風くらげ」(フェス2)では、キラキラ光るフィルムを身につけて、好きなように動きました。彼らは職員の想像を遥かに超えた動きを見せ、そこには普段見せない表情が写っていました。「風あるき」(フェス3)では、キラキラ光るフィルムを体のポーズに切って、みーらいを作りました。外ではそれを好きなように操り、風になびかせました。いつもと違う時間、いつもと違う人との触れ合い、見られるのは恥ずかしいけど何か嬉しい、ワクワクした気持ちなのです。

人が好き、お話ししたい、やってみたい、そんな願いを叶えてくれる大西さん。新しい出会いや、アルバムのページを増やしてくれた人。だから今度のフェス3では、「他の人にも楽しんでもらうんだ。大西さんのお手伝いをしたい」、そんな思いが彼らに芽生えました。「知ってるよ、やったことあるよ、こうするんだよ」と自信満々に振舞う。彼らにとっても人が喜ぶこと、大好きな大西さんが喜ぶことは幸せなのです。

そんな姿を見る親御さんは、フェスを重ねる毎に足を運ぶ数が増えました。彼らをサポートする職員も参加していく度に力を発揮しています。

小茂根にとってのTURNは、皆を幸せにしてくれるもの、ワクワクさせてくれるもの、笑顔にしてくれるものです。TURNを通して表現することは、小茂根福祉園の理念にある“私らしさ”につながっているのだと感じています。



会場の気配を記録する 現代芸術活動チーム【目】



現代芸術活動チーム【目】の荒神明香と南川憲二は、今回のフェスで、「見えない・聞こえない」という状態を徹底的に追求した。アイマスクで目を隠し、イヤーマフで耳をふさいだ荒神は、南川にサポートされながら、フェスの会場内を3日間徘徊し続けた。記録係としてのミッションを携えた荒神は、真っ暗な状態にいなながらも、何かしらの気配を感じた瞬間をインスタントカメラで撮影し、その写真(表2-表3参照)を南川が配置しながら、2人で「気配の記録」を制作。1日目は南川に誘導されながら《知覚のライン》に沿って歩いていた荒神だが、2日目は南川による誘導をやめ、《知覚のライン》のみを頼りに歩き、3日目にはついに《知覚のライン》から離れて会場内を一人で歩き始め、より気配を記録できるよう模索した。また、2日目と3日目には、荒神と同じく視覚と聴覚をふさいだ状態で会場を歩きまわる「目とあるく」と題したワークショップを実施した。



最初はものすごく怖かったです。本当に真っ暗というか、空間には何もない状態で、ただ撮影したものだけ、触れたものだけが現実というか。そのなかで手ぬぐいをつかんで南川に引っ張られながら進んで行くのですが、ちょっとでも誘導が早いと怖くて、急に崖があって落ちるんじゃないかと想像したり。横に馬場さんが作られた《知覚のライン》があったので、それをずっと触りながら行くのが精一杯でした。(荒神)



フェスの会場に入って、最初はいっぱい作品があるから、ふつうに福祉事業的な展示なんだと思っていたのですが、途中でブワッてきて、心をつかまれたんですね。言葉で説明できないのですが、展示してあるものは形式で、本当は心の中というか、グッとつかまれてヤバイと思いました。それまで事前にいろいろ聞いていたことがつながって、TURNフェスが本当に空間の瞬間でしかない心の共有みたいなものをつくっていたんだと思って、「わあ、すごく面白い!」と思いました。そこに自分が居られたことが嬉しいなと思ってきました。(南川)



2日目に気配って何だろうというのがすごく気になり始めました。この空間がどうなっているかは触れば何となくわかるのですが、気配は触れるものではなくて感じられるものだから、触ったときにこれは机であるということがわかってしまう。でも見えていないから想像しきれてなくて、またその気配を探しに行くんだけど、どうしても触ったものと自分の記憶をつなげてしまって、「これは壁である」とか「これは部屋である」ということが概念的にすごく入ってきてしまうんです。それから逃れられない状態になってすごく焦って、自分は記録係をまっとうできるのだろうかという不安が襲ってきました。(荒神)



3日目に、《知覚のライン》に卓球のラケットのようなものがあるなとわかったんです。そうしたら、近くに卓球台があるはずだと思って、「よし、これはチャンスだ」と思って、そこから離れたのが南川や《知覚のライン》から自立したきっかけです。そのとき卓球台を探したのですがなかなか見つからなくて、本当に気配のあるほうに何となく進んで行ったら、「ここは展示室である」という概念のレイヤーと別に、なぜか「洞窟」の入り口が現れて、それが両方あるんです。すごく洞窟のほうに行きたいと思ってそちらに歩いていくと、洞窟の奥にすごく大きい水溜りみたいなものがあった、これは何なんだろうと思っていました。それを探していったときに、触っていて卓球台のようなものがあったんです。そこで球を誰かに渡されて、見えないなかで卓球をしたのですが、そのときに展示室であるというレイヤーとは違う洞窟のレイヤーがあることに気づいて、これがもしかしたら気配なのかもしれないと思って写真を撮りました。(荒神)

結構、においとか温度で人がいることがわかってきます。それも、半分人間なんだけど半分動物みたいな感覚でサッと通り過ぎて行くんです。あるときは動物が横切った気がして、再び洞窟のような世界が見えてきました。「展示室である」ということと「洞窟がある」ということのレイヤーが繰り返されていて、壁を触ると繊細なものがあるなとわかるのですが、空間のなかを歩いていくと洞窟というか、湿気のある熱くて野生的なものを感じられました。そのときに、自分のなかにも建前と本音みたいなものがあった、もしかしたら展示室のなかにもそれがあるんじゃないかと気づきました。つまり、本質的には「TURN」という展覧会はずごく野生的なものを持っていて、でも建前はすごく繊細なものでできている。その感覚が、自分のなかにも展覧会のなかにもあるというのがリンクしてきて、不思議な感じでした。(荒神)

僕らはこれをやるというものが無いのに、アーティストという前に、まず人として「ここに居ていい」と言ってくれる空間って、作品を作っていないわけですよね。へおい作品を作ったらグループ展などでは居てはいけない雰囲気になるし、作品を出していないと作家としてのアイデンティティとしてはそこに居づらい。でもTURNフェスでは「人として居ていいよ」と言ってくれている気がして、そこにアクセスしてみたなら、何か見えてきた気がしました。(南川)

2017.9.9「TURNフェス3振り返りインタビュー」の発言より



【目】というアーティストグループの荒神さんは、3日間アイマスクと耳栓をして会場で記録係をしていた。彼女は展示を一切見ていないし聞いていない、そして内容について聞かされることもないという。

3日目、僕の展示室の《知覚のライン》に置いてあった卓球のラケットに気づき、近くに必ず卓球台があるはずだと初めて手すりを離れ、手探りで歩き出した。彼女が認識できたのは卓球台と、暗闇に向かって打つ球だけだったと思うが、しばらくやっているうち打ち返す手が徐々に球に近づいていった。

その日の懇親会で彼女から、あの瞬間羽ばたきがあったと聞いた。(もちろん僕は知らないふりをして話を聞いている) その話を聞いたら、3日間で初めて《知覚のライン》から離れたその動きは、雛が世界へ飛び出すようにも見えてきた。その時の光景を鮮明に覚えているので、写真に撮ったのだろうと思っていたが、写真はなかった。

—— 滝沢達史

TURN公式ウェブサイト「タイムライン」2017.8.20「TURNフェス3日間日記」より

3

トーク

会期中には、3日間を通してさまざまなトークイベントが開催された。その主な会場となった「交流スペース」は、ローテーブルにビーズクッションや折りたたみ椅子をいくつも置いたリビングルームのような空間で、各プログラムのファシリテーターがゲストとともに、交流プログラム、TURNの海外展開、教育問題、TURN LAND、アクセシビリティなど、さまざまなテーマでTURNを考え合う場となった。

トークイベントプログラム

8月18日(金)

14:30 ~ 15:30

TURN in BIENALSUR 出発直前トーク

岩田とも子(アーティスト)、日比野克彦(TURN 監修者)

16:30 ~ 17:00

高本敦基と社会福祉法人旭川荘 交流プログラム公開ミーティング

高本敦基(アーティスト)、社会福祉法人旭川荘

17:30 ~ 18:30

滝沢達史・今井さつき合同関連トーク

「不登校・ひきこもりの現場から —社会に多くの選択肢をつくること—

朝倉景樹(チューレ大学)、
佐藤真人(NPO法人ぐんま若者応援ネット アリスの広場)、
滝沢達史(アーティスト)、今井さつき(アーティスト)

19:00 ~ 20:30

新しい学びを考える

住友文彦(アーツ前橋館長)、日比野克彦(TURN 監修者)

8月19日(土)

13:00 ~ 15:00

TURN LANDをひらく

ファシリテーター：西村佳哲(働き方研究家)
朝倉景樹(チューレ大学)、新澤克憲(ハーモニー)、
高野賢二(クラフト工房 La Mano)

8月20日(日)

11:00 ~ 12:00

アクセシビリティミーティング

多様な障害特性をテーマに、
アクセシビリティと表現の交差点を探る
馬場正尊(建築家)、
石川絵理(NPO法人TA-net 事務局長)

16:30 ~ 17:15

TURNフェス3 クロージングトーク

日比野克彦(TURN 監修者)、
森司(TURN プロジェクトディレクター)、
奥山理子(TURN コーディネーター)

高本敦基と社会福祉法人旭川荘 交流プログラム公開ミーティング

全国でも有数の大規模な福祉法人である岡山県の社会福祉法人旭川荘と交流しているアーティストの高本敦基は、約5,000人の利用者と職員に対して、どのように関係性をつくっていくかを丁寧に考えた結果、利用者とともに紙粘土でつくった約5,000個の「顔」を、法人内の施設に届けるという企画に着手した。フェス3では、交流スペースで活動の様子をモニターで紹介するとともに、初日に公開ミーティングを開催。高本とプロジェクト担当職員が、交流プロセスの詳細や今後の展望について、コーディネーターの奥山とともに語り合った。



社会福祉法人旭川荘との交流プロセスを担当職員とともに紹介する高本敦基(右から二人目)

TURN in BIENALSUR 出発直前トーク

南米の16カ国32都市で展開される第1回国際現代美術ビエンナーレ「BIENALSUR」に、TURNが招聘された。これは、TURN初の海外展開となった2016年の「TURN in BRAZIL」での取り組みが、BIENALSUR 総合ディレクターの目にとまったことをきっかけに、東京藝術大学の協力のもと実現したもの。「TURN in BIENALSUR」では、日本、アルゼンチン、ペルーをそれぞれ拠点に活動するアーティスト7人が参加し、伝統的な技術や作法を携え、ブエノスアイレスとリマの福祉施設や地域コミュニティに通いながら「交流プログラム」を実施。交流のプロセスを通して生まれたそれぞれの作家の経験や作品とともに、現地の美術館にて展示とワークショップが展開された。フェス3では、交流スペースでBIENALSURの概要と7人の作家および企画案をパネル展示して紹介し、参加アーティストである岩田とも子と日比野が、ブエノスアイレスに出発する前の期待に想像を膨らませながら語りあった。



ブエノスアイレスでの交流プログラムについて語る岩田とも子(右)



TURN in BIENALSUR 開催概要

交流プログラム期間 2017年8月～9月上旬

展覧会・ワークショップ
 ブエノスアイレス (アルゼンチン)
 会期：2017年9月16日～10月29日
 会場：国立トレス・デ・フェブレロ大学付属美術館

リマ (ペルー)
 会期：2017年9月25日～10月29日
 会場：ペルー国立高等芸術学校文化センター

参加アーティスト
 岩田とも子/永岡大輔/イウミ・カタオカ/
 アレハンドラ・ミスライ/
 セバスティアン・カマーチョ・ラミレス

五十嵐靖晃/ヘンリー・オルティス・タピア

主催 国立トレス・デ・フェブレロ大学-ビエンナーレスール
 企画協力 東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)
 協力 東京藝術大学

新しい学びを考える

フェス初日の金曜の夜は、TURN 監修者の日比野克彦とアーツ前橋の住友文彦館長により、「新しい学び」をテーマにトークが行われた。美術館の館長を務め、大学で教鞭もとっているという共通点のある2人が、社会がダイバーシティを思考していく現在において、美術館としてあるいはアーティストとして、どのようなプロジェクトや姿勢を社会に発信していけばいいのか、お互いの具体例を挙げながら意見交換がなされた。

住友文彦(アーツ前橋館長) × 日比野克彦

現在の社会で求められる美術館の役割

日比野 住友さんが館長をされているアーツ前橋は、元商業施設を改修した美術館ですよ。

住友 はい。もともと西武デパートだったところをリノベーションして、2013年の10月に開館しました。個人的にもアーツ前橋の計画に魅力があったのは商業施設だった建物を利用するということでした。リノベーションのいいところは、コストの面もありますが、場所の記憶が残っていくところで、それはこれから大切になる考え方なのではないかと思っています。

日比野 今日のトークは「新しい学び」がキーワードですけど、本来の美術館が教えること、作品を収蔵し、展示して作家を紹介するという役割に、もう一つ場所が持っている記憶が乗っかってくるわけですね。つまり、「僕が小さいときはここが食堂で、お子様ランチ食べたんだよな」っていうところに、例えば、ゴッホの画が飾ってあったりするわけですよ。

住友 そこが私は面白いところだと思っています。美術作品を見るときに、実は純粋にゴッホの作品だけを見ている人はほとんどいなくて、ご飯のこととかこの後の買物のこととか、いろんなことを考えながら展覧会を見ているに違いない。そのことを、もう少し具体的に考えていくことは、展覧会や美術館の中で必要なことじゃないかと思っています。

日比野 TURN フェスの会場も美術館なんですけど、今日は美術館らしくないですよ。だいたい美術館に行くと、わかったふりをして見ているというか、作品を純粋に見なくちゃいけないっていう、何か先入観のようなものを持たれているんですけど、それこそ今回のアクセシビリティもそうだけど、誰と見に行くかで全然違う経験になるし、自分ひとりの中でも

どんな気持ちで見ると見え方が違ってくるはずなんです。

住友 TURN は「TURN フェス」っていうだけで雰囲気がいっぱい違いますよね。これはどういう意図なんですか？ フェスという名前で、しかも3日間しかやらないわけですよ。

日比野 あ、それは逆に、3日間しかできないからフェスかな？ みたいな(笑)。あと、いわゆるフェスと決まってから場所を探したので、最初はどちらかというと美術館というアイデアはなかったんです。でも、フェスの会場を探して、アクセシビリティの面とかいろんな条件となかなか見つからず、東京都美術館がちょうどタイミングが合ったので、じゃあ美術館でフェスにしようっていうことになったんです。**住友** 実際、地面に座ったり、寝転んでいる人がある風景は、すごいフェス感ありますよね。それはさっきおっしゃっていたような、筋肉を緊張させて壁を見る視点と全然違いますから、考えていることもぜんぜん違うと思います。

日比野 TURN はそういう仕掛けをいくつもやろうとしているんですけど、「学ぶ」とはこういうことだと決めつけしないで、それだけじゃないよっていうことを提示するのは、今、美術館でもたくさん試みられています。アーツ前橋もそうですし、僕も3年前からお仕事をさせていただいている岐阜県美術館も、今までの美術館では担えなかったことを、地域の中で作り出して発信していく、展覧会だけを見にくるのではなくて、そこで交流ができる仕掛けをつくるということも、美術館の新しい役割としてあるのかなと思います。あとは群馬や岐阜といった地域に求められていることもあるでしょうね。

住友 地域ということかというと、やっぱり圧倒的に東京と違うのは、周りの人との距離感が近いことですね。アーツ前橋も開館の半年位前に、作品も並べていない状態で「誰でも来てください」という日を設けたんです。来るとダンサーやパフォーマンスがいてちょっとしたことが起きるんですけど、でも基本的には空っぽの美術館で、そのときに美術館の来場者との初めての出会いだったんですね。東京の美術館と違って、幅広い年齢層と色々な属性の人が来てくれて、驚いたと同時に素直にすごく面白いなと思いました。それこそ行動とか、見るときの注意の向け方が、人によってさまざまなんです。

福祉施設が文化施設になる可能性

日比野 美術館が作品だけを展示しているのではなく、アーティスト・イン・ミュージアムのように、アーティストが美

術館に滞在してワークショップルームで制作過程を見せるように、いわゆる身体が作り上げていく作品を来場者に見せる試みがありますよね。このTURN フェスも、作家が3日間ここにいて、そこに加わった施設の人たちもいて、自分たちが作り上げてきた空気感をここに持ち込んで、それをまた来場者が見ていくという仕掛けになっています。

住友 うちも美術館の中ではないですけど、歩いて10分位のところにある建物を借りて滞在制作を行っているのと、会場の中でダンスなどの公演型の事業をやっているんですけど、身体を見るということは、その人の個性が如実に現れるから、ダイバーシティという点では一番雄弁なものだと思います。もうひとつ、アーティストの発想がどこからくるのかを知る上では、一緒にご飯を食べたり、制作中のちょっとしたドローイングを見たり、そういったものに触れる体験がすごく大きいと思っています。私は美術館の建物ができる前の設計段階のときに、アーティスト・イン・レジデンスをやったほうが良いと思ったんです。それはなぜかということ、学芸員と行政の人間だけで美術館をつくるのではなく、アーティストが何を考え美術館に何を求めているかということを見聞交換できるからです。アーティストが感じていることを作品以外でも知る方法として、やっぱりアーティスト・イン・レジデンスはとても有効だと思いますね。

日比野 いわゆるアーティストがミュージアムにレジデンスして、他のアーティストと共同生活する中から学び取ることと同じように、障害者施設や福祉施設というもの、宿泊型の文化施設になるんじゃないかというイメージが僕にはあります。非日常的な空間、そして自分が持っていない価値観と出会う場というのが文化施設のひとつの役割であるとするならば、僕が福祉施設にショートステイしたときに、やっぱり自分が味わったことがないような価値観や日常では体験できなかった時間をそこで体験することができたので。だから、美術館という役割も、美術館だけで考えるのではなく、枠を広げていろんなところが美術館や文化施設になっていく可能性も、その延長線上にはあるのかなと思いますね。

住友 私も同じですね。アーツ前橋で開催した「表現の森」では、美術館のあり方を考えるきっかけにすごくなりました。美術館で仕事していると自分は美術館のことをよく知っているようだけど、実はそうじゃなかったっていうことが、いろんな場面でありました。例えば滝沢達史さんのプロジェクトで、滝沢さんが「アリスの広場」の子供たちを美術館に連れて

くるといときに、最初は結構心配したんです。普通の人でも美術館に来るのは少し緊張するのに、大丈夫かなって。でも、滝沢さんがふらっと彼らを連れて来て、すごく印象的だったのは、彼らにとっては、街の中では見られているという感じがあるんだけど、美術館では自分たちが見るから、見られているわけじゃないので、それが却って緊張をつくらないということ。美術館が彼らにとってセーフゾーンにもなりうるんだという発見は、私が美術館という非日常的空間を、ある意味緊張という部分だけを考えていたのに対して、違うものを教えてくれました。

日比野 今回のTURN フェスでは、「表現の森」から滝沢さんの展示が巡回してきていますが、「表現の森」は、何組かのアーティストが前橋市内にある幾つかの施設と交流して行った展示ですよ。

住友 はい。交流先は、ひきこもりの支援施設と、高齢者のデイケアの施設、母子家庭の支援施設、ちょっと特殊なんですけど、インドシナ難民の人たちで精神障害を負った人たちを支援した施設、あと団地で生活している人たちです。展覧会が終わってからも、今も継続的にその施設と関わっていたりするので、行き来がしやすい近場で、ある程度施設の人と関係性をつくれるかどうかを重視しました。

日比野 展覧会やフェスという場だけで終わらない継続性ということも重要ですね。アーツ前橋の行っている「表現の森」とTURN はとても似ているところがあって、お互いに興味深く見ているので、これからもどんだん一緒に協働できればと思っています。

【トーク「新しい学びを考える」より一部採録】



住友文彦(左)と日比野

TURN LANDをひらく

現在、TURN が構想している TURN LAND とはどのようなものなのか。TURN のプロジェクトに関わっている施設の中から、シューレ大学の朝倉景樹、ハーモニーの新澤克憲、クラフト工房 La Mano の高野賢二、そしてファシリテーターとして西村佳哲が加わり、TURN LAND に抱いているイメージや期待について語り合った。

ファシリテーター：西村佳哲(働き方研究家)
新澤克憲(ハーモニー) × 朝倉景樹(シューレ大学) × 高野賢二(クラフト工房 LaMano)
聞き手：奥山理子

TURN LAND に寄せる期待

西村 まず始めに、TURN LAND が構想された経緯をコーディネーターの奥山さんから伺います。

奥山 そもそも TURN は、TURN フェスの開催と TURN センターの開設という二本柱を打ち出して 2015 年に始まりました。TURN フェスが 1 年に 1 度、TURN を体感できる祝祭の場として設定されたのに対し、TURN センターは、当初から持続性を意識していた TURN のプロジェクトを 365 日、日常的に発信し、共有できる場として考えられました。

西村 その時点での TURN センターは、新しく建てられる文化施設のようなものを想定していたのでしょうか。

奥山 そうですね。何かしらの新しいサードプレイスをつくらうというのがイメージの出発点でした。ただ、TURN センターを開設するにあたっては、非常に丁寧な段階を踏まなければいけないと私も日比野さんも考えていたので、1 年目はまず TURN フェスを行うことにして、そのためのプロセスづくりとして交流プログラムが新設されました。そして 2 年目になり、今日お越しいただいている施設の方々を含め、「TURN センター構想会議」というものを立ち上げて、どのようなセンターが望ましいか話し合っていました。その中で、日比野さんが昨年(2016 年) 11 月に、「つくるべきはセンターじゃなくて、ランドなんじゃない?」と突然おっしゃったんです。つまり、これまで出会ってきた施設の特徴や時間を上手く作り直していくことによって、島々のような拠点が複数同時につくられていくという状況こそが、TURN に相応しい有り様ではない

のかと。そこから TURN LAND に名前を変えました。

西村 新たに建物を造るのではなく、既にある施設の一部やその一角に、新たに TURN LAND と呼ばれるような場所や機能がたくさんできていく、TURN アイランズのようなイメージに変わっていったんですね。では、続いて施設の方々に、TURN にどんな関わりを期待されているか、また TURN LAND というテーマについてお考えを伺いたいです。

新澤 世田谷区にあるハーモニーという施設は、比較的重度の精神障害の方が利用されていますが、活動のひとつとして、利用者さんが日々感じている大変さや幻聴妄想の体験を短い言葉に落とし込んだ「幻聴妄想かるた」というものを作っています。当初はいわゆる当事者研究の文脈でとらえられていたのですが、それを表現活動としてアートの枠組みで見直してくださる方たちがいて、美術館などで展示をする機会も生まれました。TURN には最初の年から参加していて、フェスでは利用者さんも楽しい体験をさせていただきましたが、一方で、日頃からメンバーさんがお世話になっている施設の近所の人たちに、私たちの活動をもっと分かってもらいたいという気持ちが強くありました。その意味で、自分たちの場を基盤とした活動をもっとひらいていけそうな TURN LAND の構想は歓迎しています。

西村 TURN LAND によって場をひらきやすくなると、近所に住んでる方々に、ハーモニーが何をしている場所なのかということが、これまでとは別のチャンネルで伝わりやすくなるんじゃないかということですね。

朝倉 シューレ大学は、「学び」ということを大事にして集まってきた若者たちが活動している場です。共通項としては、自分の生き方をつくって暮らしていきたいという思いを持っていることと、結果としてですが、9 割くらいの方が不登校や引きこもりを経験しているということがあります。そのような経験のある人は自己否定の感覚をとて強く持っているのですが、抱えている生きづらさを真正面から見つめる「自分研究」を通して、また、関心のあることを見つけ掘り下げていくことによって、自分を知り、世の中とつながっていく方法を一人ひとり模索しています。

西村 TURN ではアーティストの今井さつきさんと交流を続けていらっしゃいます。

朝倉 今回のフェスでも一緒に参加している今井さんには、「TURN LAND をひらくということは、シューレ大学が既にやってることじゃないですか?」と言われました。アーツ

トが来て、地域や外部の方も含めて出会って表現が生まれるような場が TURN LAND だとするならば、既にしているのかもしれませんが。ただ、TURN での今井さんとの関係は、学生たちと年齢が近いこともあり、「作り合う」ということを先入観なしにできるところが、著名な方に講師を頼む場合は少し違う面白さなのかなと思ったりしています。

西村 学生たちも、これから自分の居場所をどうつくっていくかというアーティストとなら一緒に育っていきやすいので、教育効果が高いのかもしれないですね。

高野 町田市から参りましたクラフト工房 La Mano の高野です。現在利用されてる方の多くは知的障害のある方で、染色と織物をメインとしたものづくりを通して社会と接点を持っています。TURN には初年度の交流プログラムから参加させていただいて、五十嵐靖晃さんというアーティストとの出会いがあり、La Mano にとっても一つの転機になりました。TURN LAND については、構想会議でセンターという集約するようなイメージがあったときは、正直どのように関わっていけばいいのか疑問符もあったのですが、一つひとつが存在するような LAND というイメージを聞いたときに、それなら自分たちが変わらずに人との関わりや交流の形ができそうだと感じて、今はすごく楽しみです。

ひらくことで地域や社会とつながる

奥山 TURN LAND という新たな言葉から、私たちは、いわゆるマイノリティの施設が、これまで対象としてきた人たちだけではなく、多くの方が訪れることができる文化的な施設になり得るのではないかというテーマを考えましたが、皆さんが「施設をひらく」というとき、どんな形でやってみようと思っていられるのか、少し伺いたいです。

新澤 ハーモニーでは、僕たちの町をテーマに考えられないかなと思っています。利用者も施設の周りに住んでいるので、日頃生活している場も施設と同じ町にあるんですね。普通の人は気づかないかもしれないけど、そんな中で幻聴が聞こえたりする彼らなりの不思議な生活を送っています。それを知ってもらうために、町をスタンプラリーで回ったり、メンバーが同行するツアーを、アートの仕立てで LAND の活動としてできたら面白いかなと、今スタッフで話し合っているところです。

朝倉 私たちシューレ大学は若者たち 6 人で始まったんですが、最初の頃は人数が少ないので、例えば演劇を学ぶのに講師

の方に来てもらってワークショップをやるとき、外部の方にもひらいて、その人たちから受け取る受講料を講師料に当てるということをよくやっていたんです。そんなときは、メンバーと外部の方が同じ関心を共有している中で一緒にやるので、特に問題も起きませんでした。ですから、メンバーがやりたいことに絡むことで場をひらいてアーティストに関わってもらおうというのが、シューレ大学にとって素直な LAND の持ち方なのかなという気がしています。

高野 私たちは今、工房の敷地にある畑で綿を育てていて、その育てた綿を紡いで糸にして、機織り機で製品を作る、「コットンプロジェクト」というのを昨年からやり始めていますが、その綿の種をいろんな方に渡してそれぞれの場所で育てただけで、できた綿をまた工房に持ってくると工房の商品が買える券と交換をしたり、ワークショップでものづくりを体験してもらったりと、自分たちが得意としているものづくりをテーマに、いろんな人たちとつながる大きなサイクルが展開できたらいいなと考えています。

西村 ありがとうございます。私は、福岡で暮らしていたときに、友人が運営していた障害者たちがものづくりしている作業所を訪ねて、皆に混ざって原稿の推敲をするのがとても好きでした。非常に穏やかな時間が流れている中でそれぞれ黙々と作業をしたり、一緒にお茶を飲んだりして、近くにこういう人たちがいるということが日常的な経験として得られるのは、すごくリッチだと思いました。そのように、見学とはまた違う形で、ただ同じ空間に「一緒に居れた」という経験をどのようにしてつくっていけるのか。お話を聞きながら、TURN LAND にはその可能性を感じました。

【トーク「TURN LAND をひらく」より一部採録】



左から高野賢二、朝倉景樹、新澤克憲、西村佳哲

アクセシビリティミーティング

それぞれの立場の「アクセシビリティ」をテーマに、視覚障害をもつ馬場正尊と、ろう者である石川絵理による手話通訳者と文字支援を介したトークが行われた。それぞれの個人的な経験を交えた対話から、それをを用いることによって社会全体がより豊かになることを考えられるアクセシビリティのあり方について、来場者と一緒に考える場となった。

馬場正尊(建築家) ×
石川絵理(NPO法人TA-net 事務局長)

障害の感じ方は千差万別である

馬場 馬場です。普段は建築の設計やデザインの仕事をしていますが、視野がちょっとずつ狭くなっていく緑内障の症状が、この10年くらい一気に進行して、今は目の端の方の視野だけが残っています。まだ日常生活は何とかできるんですが、活字はほとんど見えず、タブレット端末で大きくして見たり、あとはSiriの音声認識機能を使ってメールや文章を書いたり、小説を読んだりということを、いろんな人の手伝いを受けながらしています。そういう僕の状況をアーツカウンシル東京の森さんに伝えていたら、ある日突然連絡がきて、「TURNフェスでサイン計画を考えてみませんか？」という依頼があり、今回《知覚のライン》で参加させてもらいました。

石川 初めまして、石川と申します。今、手話通訳が読み取りをして私の代わりに声を出しております。TURN そのものに関しては2年くらい前から関わりを持っていますが、もともとの団体の仕事は舞台鑑賞における障害者へのサポートを行っていて、聞こえない人に対しては文字支援や手話通訳を見えない人に対しては音声ガイドをつけたりしています。今挑戦中のことは、UDトークで字幕を配信するという方法で、もうひとつの試みとしては、舞台上立って、出演者と一緒にパフォーマンスをしながら台詞をそのまま手話で出すという、パフォーマンス的な役割のある手話通訳の養成をしています。

馬場 馬場です。石川さん自身は生まれたときから耳が聞こえない状態なのでしょうか。

石川 石川です。私自身は生まれたときから全く聞こえません。幼い頃からろう学校に通って、聞く訓練、発語の訓練、それから日本語の文字の読み書きの訓練をしました。今は一

応発声もできますが、やはり聞こえない人なりに発声はいろいろ違うんですね。聞こえ方もその人によって様々で、補聴器を使えば少し聞こえる方、または普通に会話ができる方、本当にいろいろありまして、自分の中で聞こえていた情報をうまく組み合わせて、欠けているところをうまく補って考えながら聞いている方もいらっしゃいます。

馬場 馬場です。先天的に聞こえない、見えないという場合と、後天的にそれを失っていく場合とでは、やはりだいぶ感覚が違うんだなと、改めて感じました。僕は、実は見えにくくなってからの方が、人の話をしっかり聞くようになりました。昔は打ち合わせのときにメモを取っていたんですが、メモを取らなくなってから、いろんな人の話や全体が頭にちゃんと入ってくるようになったんです。何かを欠落することによって気づく感覚があるなと思います。だから思ったより不自由はなくて、ちょっと不思議な感覚を味わっています。今はテクノロジーによって、いろんなことが便利になってきていると思うんですが、例えば今回のTURNフェス3でも使用されているUDトークは、どのようなきっかけで開発されたのでしょうか。

石川 石川です。UDトークというのは、実は私たちが開発したものでなくて、青木秀仁さんという方が開発して会社を立ち上げたものなんです。しかも、開発したきっかけは障害者関係団体と接点を持ったことから。今ではマイクを持って喋ると文章化され、会議で議事録を作る際にすぐに作成し発信できるツールとしても使われています。ですから、読み上げ機能というのは、あとから追加されたものです。

馬場 馬場です。そうだったんですか。それが進化してくれれば、僕らにとってはすごく助かります。テキストで書いたものを読み上げる機能がかなりのスピードでやれるようになったら、たぶん、手話通訳の方を介さなくても話したことがテキスト化され、見えない人、聞こえない人、聞こえない人、聞こえない人の間でもダイレクトにコミュニケーションが取れる可能性があると思うんです。

石川 石川です。その可能性はあると思います。ただ、UDトークのようなソフトも、聞こえない人全員にとって有効かというところまた別の問題があります。聞こえない人の中には、助詞の使い方など、意味が通じにくい日本語の文章を書かれる方もたまにいらっしゃいます。ですから、本当に文字支援が皆にとって有効かというところは違っていて、手話通訳が良いという方もいらっしゃいますし、非常に千差万別であるということです。

障害者のためだけではないアクセシビリティ

馬場 馬場です。僕は見えなくなり始めた頃、最初は電車に乗るときに、周りの人に聞くのが嫌だったんですよね。どうしてかは今もよくわからないんですけど。だからタブレット端末でサインを写真に撮って、拡大して方角を確認するということを結構していました。でもあるとき開き直って、周りの人に「目が不自由なんですけど」と枕詞をつけて、「〇〇はどっちですか？」と聞いてみたら、随分楽になりました。そして、逆にこちらが申し訳なくなるくらい丁寧に教えてくれて、みんな優しいなと思ったんですね。石川さんはいろいろな経験をされていると思いますが、障害に対して社会は今どんな感じなのか、良いことも悪いことも含めて聞いてみたいです。

石川 石川、笑っています。すごく大きなご質問なので本当に細かく言えばたくさんあるんですけども、取り組んでいるTA-netの仕事に関して言えば、まだまだです。字幕をつけてほしいとか、台本を貸してほしいとか、そういう要望にも、「準備はできません」という回答が多いです。小さな劇団の場合は積極的に協力してくれたりするんですけど、逆に大きな劇団やプロダクションの場合はなかなか対応してくれないというのが実情です。

馬場 馬場です。高齢化社会に向かう中で、障害でもなくてもいろんなことが不自由になる人も増えていくと思うので、そのあたりは今からしっかりマーケットとして捉えなおしていく企業が現れてもいいと思うんですけどね。

石川 石川です。そうなんです。今、劇場で私たちが実際に行っているのは、皆さんが持っているようなスマホに配信して、一人ひとりが字幕を見えるという方法なんですね。それが、舞台上で観客全員に字幕が見えるオープンな形の字幕ができれば、聞こえにくい方だけでなく、留学生にとっては日本語の勉強になるという考え方もありますし、私の友だちで発達障害の方は、普通に日本語を聞いただけでは頭に入らないけれど、聞きながら文字を同時に見ると理解できるという話も聞いています。ですから、聞こえない人に絞るのではなく、本当にもっとオープンな形で進めていけば、みんなで一緒に考えていければいいなと思っています。

馬場 馬場です。僕もサイン計画の相談を受けたとき、視覚障害者の立場としては、できるだけサインが大きくてコントラストの強いビジュアルのほうが見えやすいんですが、空間をつくっていくデザイナーの身としては、そのサインのため

に見える人たちが経験する風景を犠牲にするのは嫌だと思ったんです。だから、ぜんぜん違う次元のサイン計画ができなかなと思いました。それで、僕が移動するときに何かに触れていると安心するという感覚を、そのままサイン計画に落とすことによって、《知覚のライン》が生まれたんです。同時に、触れるというのは、普段の生活で人が忘れていた感覚に対して鋭くなる、思い出すような感覚でもあるので、そういう意味で、視覚障害の人だけではなく、いろんな知覚が覚醒するきっかけを作ることができるのではと、イメージが広がっていきました。

石川 石川です。私もとても面白かったです。フェスの準備の日に気づいて、これは何だろうと聞いてみたら、《知覚のライン》の説明を受けました。はじめは自分の中では不思議な感じがあったんですが、初日、2日目になると、日比野さんがラインにいろいろ書き加えていて、それは私も見えるので、こういうメッセージがあるんだなと、面白く思えてきました。馬場 馬場です。よかったです。ある意味、まだ僕の場合は本格的な障害ではないというか、中途半端な障害のような気がしているので、本格的に困っている障害の方のところに飛び込みにくい感じがあったんです。躊躇するというか遠慮してしまうといえますか。でもこういう機会をいただいたおかげで、気楽にコミュニケーションできるようなきっかけの扉を開かれた感覚があります。では、最後にこの場でUDトークを使って、僕と石川さんでダイレクトにコミュニケーションしてみましようか。

〔トーク「アクセシビリティミーティング」より一部採録〕



石川絵理(左)と馬場正尊

*手話通訳では、発言者が複数いる場合に話者を明確にするため、毎回名前を名乗ってから発言をする慣わしになっている。本トークを採録するにあたり、そのルールを誌面でも再現した。

TURNフェス3 クロージングトーク

最終日の夕方には、TURN 監修者の日比野克彦と、TURN のプロジェクトディレクターを務める森司、コーディネーターの奥山理子の3人によるクロージングトークが行われた。3日間を振り返りながら、アクセシビリティのテーマが生まれたきっかけやこれまでのTURN フェスとの違い、それぞれが体感した会場の雰囲気や今後のTURN フェスについて語り合った。

日比野克彦×森司×奥山理子

これまでとは異なるTURNフェス3のフレーム

奥山 TURN フェス3最後のイベントプログラムとなりました。まずはTURN 監修者の日比野克彦さん、この3日間のフェスを振り返っていかがでしたでしょうか。

日比野 3日間にわたる今回のTURN フェス3では、例えば、山縣さんとこのがっこうが行った講評会のように、従来の交流プログラムでの成果の発表に限らず、TURN の活動とシンクロしている作家の活動をフェスに持ち込んでいただくような形の参加がありました。そこがこれまでのTURNフェスと最も違うところで、これまでにない幅の広がりがあったなというのが、僕の感想です。

森 日比野さんに話していただいたように、TURN フェス3は少しだけフレームを変えました。理由として大きなことの一つは、昨年我々がブラジルに行き、リオデジャネイロでのTURN in BRAZIL を経験したということがあります。フェスの中でパネルで紹介しているように、今年もこのあと始まるアルゼンチンとペルーで開催されるビエンナーレスール(BIENALSUR) でTURN を展開していきます。そういった形でTURN が国際展開する中で、いくつかの取り組みを変えていこうということがありました。もうひとつは、2年間交流プログラムをする中で各施設の方たちから上げていただいた意見をもとに、今年の4月から、交流は継続しながら、フェスはフェスでしっかりつくり上げ、交流先はTURN LANDとしての活動を展開していきましょうという新しい枠組みになったことがあります。今回初めてTURN フェスがアクセシビリティというテーマを持ったのも、そのことによります。

奥山 今年の3月にTURN フェス2を終えて、まだ半年しか経っていない中でTURN フェス3を迎えるということも念頭

にありました。この短期間で見せられるもの、そして連続して参加するアーティストに異なるモチベーションをもって関わってもらう手段を考えたということも、今回かなり大きかったなと、現場にいて感じているところです。

日比野 アクセシビリティというテーマを掲げることになったのは、2020年に向けてTURN フェスはどうかという話をしている中で、ソフトの部分で何をやるかというよりも、来る方々にちゃんとアクセスしてもらうということを中心に考えてみよう、そこにアクセスするというを一回テーマにしてみようということがありましたよね。上野公園は、動物園、博物館、文化会館、美術館、東京藝術大学という文化施設が集中している空間で、どこもアクセシビリティを考えています。それをしっかり共有しながら、もっと細やかにできることを考えていくことが大事だよねって話が出てきて、TURN フェスにおいてもアクセシビリティをテーマに考えてみよう。そのときに、馬場さんにサイン計画を頼むところから始まったので、会場構成も、馬場さんの《知覚のライン》がすべての壁に1本つながるようにして、ラインのある地上70センチの壁には作品を置かないというところから始まっているというのが、TURN フェス3のこれまでとは一番大きな違いかと思います。

奥山 TURN で考えるアクセシビリティって、無名のどこかにいるかもしれない障害のある人のことを考えるのではなく、これまで3年間TURN でいろんなプログラムをやってきて、障害のある人もいれば生きづらさを抱えた人もいる、いろんなバックグラウンドの人たちの一人ひとりとの出会いを大切にしてきたからこそ、具体的な人を想像しながら作っていくのがTURNらしいなとすごく思いました。馬場さんにも、視覚障害がある馬場さんに今回はお願いしなければいけない必然的な理由がありました。他にも、例えば井谷優太さんと出会って話をしているときに、「そもそもどうやって打ち合わせ場所までひとりで来てるんですか？」っていうところから始めて、フェスの会場に来るまでの道のりをドキュメントする映像作品ができたりと、アクセシビリティをテーマにすることで、交流プログラムとは違うレイヤーでありながら親和性高く取り組めたというのは、私たちにとっても、豊かな経験になったなと思います。

森 それから、入口でお配りしたチラシにもありますように、朝から晩まで3日間、目白押しのガイドツアーを行ったのも、今回の試みの中での大きなポイントです。アクセシビリティ

を考えてたときに、テクノロジーによるサービスだけでなく、実はこういうフェスをどのように見たらいいんだろうというガイドそのものに、まだ開発の余地があるんじゃないかと思ったからです。

社会実験を試す場としてのフェス

日比野 今日は、浜松からレッツのたけしくんが来てテンギョウさんといたり、森山開次さんが山縣さんの部屋で一緒に話し込んでいたり、その部屋の向こうでは山城くんがトークしたりと、僕もここに居たいけど向こうも気になるみたいな、相当ぐるぐるした最後の15分位があったんですけど、いろんなところで語りが行われていた状況があったというのも、今回の大きな特徴だったと思います。会場にふらっと入って来た人が見たときに、それがプログラムじゃなくてたまたまそこで出会った人が話してるんじゃないかっていうくらい、その場に馴染んだ空間になっていたのが嬉しくて、これからの活動も、そういう時間と空間、空気感を増幅していきたいなとすごく感じましたね。

森 交流プログラムから始まったフェスへの展開で一番シンボリックなのが、今回一番奥にある大西くんのところなんです。そこは3日間、小茂根福祉園の利用者の方がいらっやいて、20人、30人と過ごしていきました。まさに施設の中での交流と同じ状況があつたんですね。一方で、すぐ横の暗い照明になっている富塚さんとジャンジさんの《光の広場》では、新人Hソケリッサ!のチームが通ってくれて、その場で過ごしながら連日踊ってくれたり、あるいはゲストで来てくれたらうの方たちが、瞬間的ですが早い手話で会話を始めたりするシーンもありました。普通の会話と同じように、あちこちで同時に手話が始まる空気感って、僕としては初めての体験で、それまでは健常者が話してはいけないルールで静寂が保たれている空間の中で、すごく熱のあるさまざまなことが起きていて、だんだんそれが外に滲み出して混じって、アーティスト同士も勝手に交流して、いろんな場所に遊びに行ったりするというのが起きていました。そういった72時間ワンセットになった成果みたいなものが、実感としてありますね。

奥山 あっという間に時間が過ぎてしまっているのですが、来年のフェスはテーマが変わって、アクセシビリティがなくなってしまうのか、それともアクセシビリティがあった上で別の

テーマが重なるのか、最後のお二方の考えを聞いてみたいと思います。

日比野 アクセシビリティに乗っかっていく感じになると思いますね。例えば、いま《知覚のライン》が部屋の入口から始まっていますが、このアクセシビリティを上野公園の入口から始めるようなことも考えられます。そうすると、上野公園全体でやらなければいけないことが自然に見えてくると思うんです。

奥山 たしかに、美術館に入らないと味わえないというのはなく、「うちのところまで《知覚のライン》を延ばしてよ」と言ってもらえるような外部からの働きかけが生まれていくといいですし、私たちも努めていきたいと思います。

森 アクセシビリティはずっと続けていくものだと思いますが、まだ非常に粗いレベルで会場にインストールしたにすぎないので、これをどうやって特別なものじゃないことにしていくのか。そのためにはまだいろんな問題がありますけれど、それを皆で実験をして試す場所としてのフェスになれば良いと思っています。

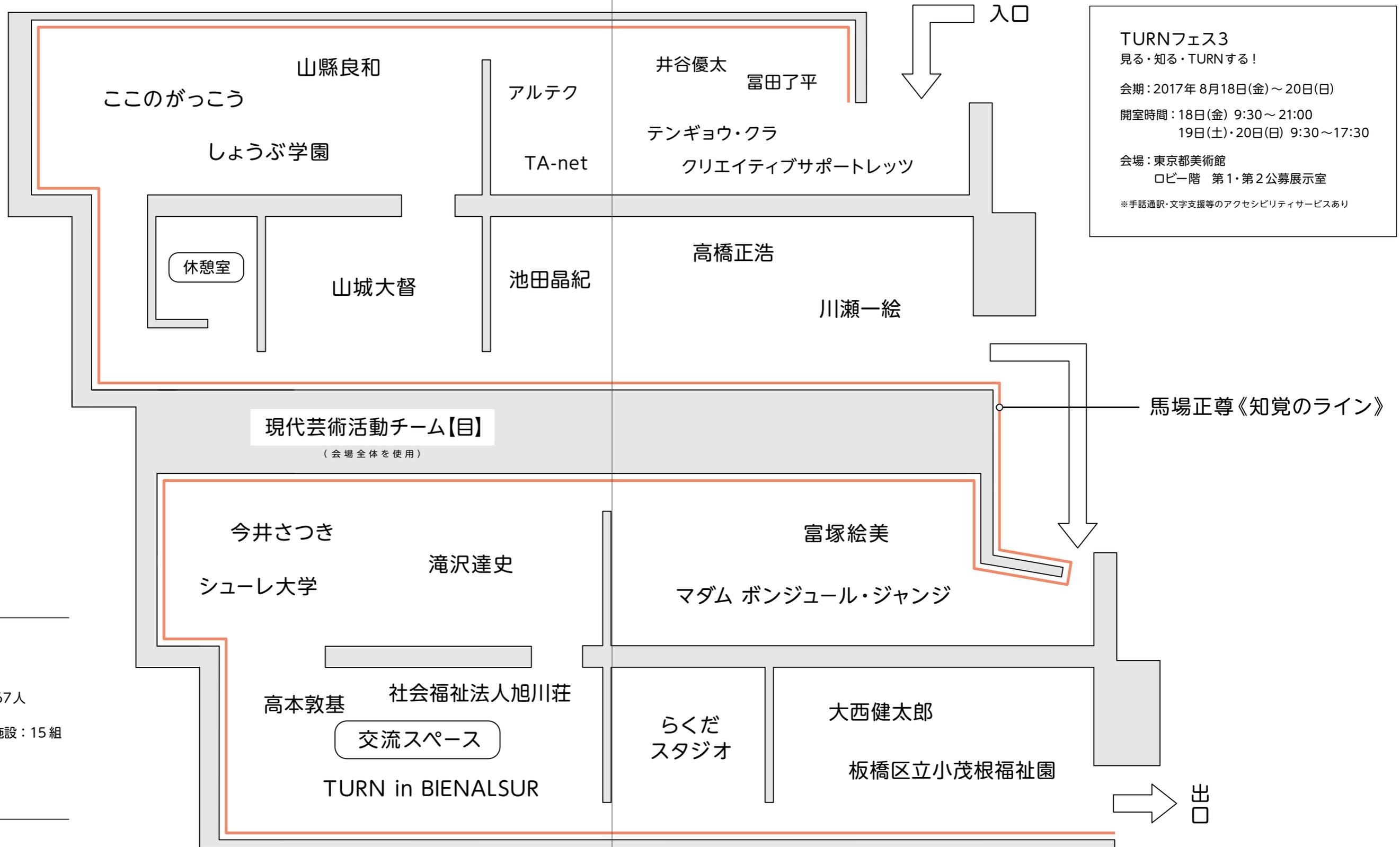
奥山 ありがとうございます。手話通訳と文字支援を3日間通してコーディネートしていただいたシアター・アクセシビリティ・ネットワークの皆さんにも、改めて拍手をお願いします。

日比野 それでは、TURN フェス4でまたお会いしましょう！
[トーク「TURNフェス3クロージングトーク」より一部採録]



左から森、日比野、奥山

会場構成



TURNフェス3
 見る・知る・TURNする！
 会期：2017年 8月18日(金)～20日(日)
 開室時間：18日(金) 9:30～21:00
 19日(土)・20日(日) 9:30～17:30
 会場：東京都美術館
 ロビー階 第1・第2公募展示室
 ※手話通訳・文字支援等のアクセシビリティサービスあり

来場者数：約 2,300人
 TURN フェスサポーター：67人
 参加アーティスト・交流先施設：15 組
 実施プログラム：24

プロフィール・施設紹介

ばばまさたか

馬場正尊

オープン・エー代表取締役／公共R不動産ディレクター。1968年佐賀県生まれ。1994年早稲田大学大学院建築学科修了。博報堂で博覧会やショールームの企画などに従事した後、早稲田大学博士課程に復学。雑誌『A』の編集長を経て、2003年OpenA Ltd.を設立。建築設計、都市計画、執筆などを行う。同時期に「東京R不動産」を始める。2008年より東北芸術工科大学准教授、2016年より同大学教授。建築の近作として「Re ビルプロジェクト」(2014～)、「佐賀県柳町歴史地区再生」(2015)、「Shibamata FU-TEN」(2017)など。近著に『PUBLIC DESIGN 新しい公共空間のつくりかた』(学芸出版・2015)、『エリアリノベーション 変化の構造とローカライズ』(学芸出版・2016)、『クリエイティブローカル エリアリノベーション海外編』(学芸出版・2017)がある。

いたにゆうた

井谷優太

重度障害を持っていてもステージで演奏できる方法を独自に考え出し、表現活動を通して、心のボーダーレス化を啓蒙する。2015年には東京国際フォーラムで開催された、「第12回ゴールドコンサート」(2015)にオリジナル曲で出場し、最優秀賞を受賞。常に自分の可能性を追及し、音楽のみならず様々な手法に挑戦し続けている。

とみたりようへい

富田了平

1986年名古屋市出身。フォトグラファー／ビデオグラファー。東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科卒、同大学院音楽研究科修了。東京と名古屋をベースに、様々な形態のプロジェクトの写真・映像での記録のほか、映像作品の制作などを行う。

テンギョウ・クラ

教師／コミュニケーター／ストーリーテラー。ヴァガボンド(放浪する者)を自身のライフスタイルとして、教師の活動をベースに国や地域を問わず移動と滞在を繰り返しフォト・ストーリーを制作している。滞在了た地域の人々との交流を通じて在住者と来訪者の関係性に揺らぎを生み出し、そこに多様なコミュニケーションの可能性を見出す。大学での講演や旅の写真展の開催、現代アーティストとのコラボレーション、様々な文化を紹介するイベントの企画など、異文化交流をテーマにした活動を世界各地で展開。教師としては、モンゴルの孤児院支援でウランバートル市

から表彰、スリランカの津波被災者救済活動、ノルウェー初の原爆展開催、ラトビアの首都リガ市で外国人教師として初めて最優秀教師賞にノミネートされた。2017年12月よりアフリカ各国を放浪中。

にんていとくていひえいりかつどうほうじん

認定特定非営利活動法人 クリエイティブサポートレッツ

アルス・ノヴァ／のヴぁ公民館はNPO 法人クリエイティブサポートレッツが運営する障害児者通所施設と私設公民館である。レッツでは平成20年に「たけし文化センター」を起草。重度の知的障害のある「くぼたたけし」が持つ「やりたいことをやりきる熱意」を文化創造の源と捉え、その名を冠した個人同士の交わりが生まれる場を開いた。翌年開設したアルス・ノヴァでは、「やりたいこと」に寄り添う関わりを実践する。現在は、誰もが「居る」ことのできるのヴぁ公民館の運営のほか、個人個人の隠れた生活文化を顕在化する「表現未満、」プロジェクトを行っている。

とくていひえいりかつどうほうじん

特定非営利活動法人 シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

2012年設立。「みんなで一緒に舞台を楽しもう！」を合言葉に当事者が主体となって観劇支援を推進する活動を展開している。定例会を毎月第2金曜に開催。観劇サポートに関する情報発信をFacebook やブログ、メルマガ等で行っている。

やまがたよしかず

山縣良和

2005年、セントラルセントマーチンズ美術学校卒業。在学中にジョン・ガリアーノのデザインアシスタントを務める。2007年にリトゥンアフターワーズを設立し、コレクション、展示会、ショーなど、ファッション表現を通じて、社会的、文化的、教育的、環境的観点を持った新たな人と人との関係性を創造して、新しいファッションの役割を提案している。2008年9月より東京コレクション参加。2008年より「ここのがっこう」を主宰。

ここのがっこう

ファッション表現の実験、学びの場として、デザイナーの山縣良和が2008年に設立。「ここ」とは、場所を表す「ここ」であると同時に、多数の中の1人1人を表す「個々」を意味している。

しょうぶ学園

1973年、鹿児島県鹿児島市に社会福祉法人太陽会しょうぶ学園設立。施設入所／短期入所／生活介護／自立訓練／就労支援などを展開。障害を持つ人たちの感性あふれる創作の姿勢に魅せられ、芸術・音楽活動を中心に個性的な活動を行う。障害のあるなしに関わらず、支援を必要とする人、支援を提供する側といった枠を取り払い表現者という同じ立場で、ものづくりをとおして、人が本質的に備えている創造する力を引き出し、協働する者としてよるこびとわかりあえるコミュニティづくりを夢見ている。人と人がささえあい、つながりあい、つくりだすくらし。そうした環境から生まれた作品は、クラフトやアートの世界から高く評価され、開催(出展)する展覧会は国内だけでなく、海外にもおよんでいる。

やましるだいすけ

山城大督

美術家／映像ディレクター／ドキュメント・コーディネーター。1983年生まれ。名古屋市在住。映像の時間概念を空間やプロジェクトへ応用し、その場でしか体験できない《時間》を作品として展開する。「Nadegata Instant Party (中崎透＋山城大督＋野田智子)」メンバー。タイムベースド・メディアインスタレーション作品『VIDERE DECK』が、第18回文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員会推薦作品に選出。。

たがほしまさひろ

高橋正浩

社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンターの利用者。リサイクル洗びんセンターは、「福祉と環境をつなぐ」「障害の種別を越えて」「高い給料」を掲げて1994年4月、東京都昭島市に誕生。びんやリユースカップの洗浄、とうふの製造・販売、チラシセット作業、食品加工作業、軽作業、物品販売などの仕事に、現在87名の障害のある人が取り組んでいる。障害のある人がいきいきと働き、地域で安心して暮らしていける社会の実現をめざしている。

いけだまさのり

池田晶紀

写真家。1978年横浜市生まれ。1999年自ら運営していた「ドラックアウトスタジオ」で発表活動を始める。2003年よりポートレイト・シリーズ『休日の写真館』の制作・発表を開始。2006年写真事務所「ゆかい」設立。2010年スタジオを馬喰町

へ移転。オルタナティブ・スペースを併設し、再び「ドラックアウトスタジオ」の名で運営を開始。国内外で個展・グループ展多数。アーティスト三田村光土里とのアートユニット「池田みどり」としても活動。

かわせかずえ

川瀬一絵

写真家。島根県出雲市生まれ。島根大学教育学部、東京総合写真専門学校卒業。2007年より写真家・池田晶紀の主宰する写真事務所「ゆかい」に所属。テーマを定めずに衝動的に撮り、それらを編集しながら衝動の訳を探るような作品づくりをしている。

とみづかえみ

富塚絵美

アートディレクター／演出・振付／パフォーマー／イラストレーター。1985年神奈川県生まれ。通称ちより。東京藝術大学大学院を修了後、一般社団法人谷中のおかってを設立、ディレクターとしてアートプロジェクトを企画運営。2009年より台東区の谷中に文化創造拠点を創造するアートプロジェクト《ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト》を開始。2013年にホームパーティー形式パフォーマンス《どーぞじんのいえ》、2015年にピクニック形式パフォーマンス《威風 DoDo》を発表。

マダム ボンジュール・ジャンジ

Female Drag Queen／パフォーマー。あらゆる境界線を超えたキラキラした世界を願う活動家。東京を拠点にフランス、ベルリン、ストックホルムなど世界を股にかける。1997年より交歓のミックスParty「ジューシー！」をオーガナイズ。「HUGたいそう」のハグハグ伝道師。新宿二丁目にある「コミュニティセンター akta」センター長を務める。

たきざわたつし

滝沢達史

アーティスト。多摩美術大学油画専攻卒。東京都特別支援学校にて知的障害児への美術教育に従事した後、越後妻有トリエンナーレなど国内の芸術祭に参加。ひきこもり・不登校の子どもたちとの活動（アーツ前橋）や、子どもの主体性に任せた表現活動（カマクラ図工室）などにも取り組んでいる。

いまい

今井さつき

1988年神奈川県出身、横浜市在住。2013年愛知県立芸術大学美術研究科デザイン専攻修了、2017年東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。体験者が作品を体験することで完成するコミュニケーションアートの制作を行う。

シュール^{だいがく}大学

1999年、東京都新宿区に必要とする若者たちと準備会をつくって生まれたオルタナティブ大学。自分はどのように生きて生きたいのか、お金とどんな風に付き合い生み出して生きたいのか、人や社会とどうつながるのが自分に合っているのかを模索する、自分に合った生き方を創り出す大学。履修すべきカリキュラムなどなく、一人ひとりが自分の教育をデザインし、自分の知りたいこと表現したいことに取り組んでいる。通う日にちや関わり方も人に合わせて違った形をとり、在籍期間も自分で決め、「自分がこの自分で生きていけるなあ」と感じたら巣立っていくというような場である。18歳以上の若者達が30〜40人で話し合いながら場の運営もしている。自分とは何者なのか、自分はどよう生きていけるのかを思い切り試行錯誤できる場でありたいと思っている。安心して人とつながり、だから存分に関心を探し、深められるのではないかと、そんなことを大切にしている。

らくだスタジオ

2009年、横浜国立大学卒業生を中心として映画制作を目的として設立された映像制作会社。2013年より品川区に本社を移転。主宰の田村 大(たむら・ひろし)は映像演出・脚本家。大学在籍中、故・梅本洋一氏の下で映画論を専攻。大学の同期らと共に株式会社らくだスタジオを設立後、劇映画、ドキュメンタリー、ミュージックビデオなど多様な映像制作に携わる。

おおにしけんたろう

大西健太郎

ダンサー。1985年生まれ。東京藝術大学大学院先端芸術表現科修了後、東京・谷中界隈を活動拠点とする。その場所・ひと・習慣の魅力と出会い「こころがおどる」ことを求めつづけるパフォーマー。「風」をテーマにダンス・パフォーマンス作品の公演をおこなう。2011年に東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）と一般社団法人谷中のおかっでの共催によることも創作教室「ぐるぐるミックス」を立ち上げ、ファ

シリテーター、統括ディレクターを務める。2014年より〈風と遊びの研究所〉を開設。他者との共同創作によってつくり出す参加型パフォーマンス「風あそび」に取り組んでいる。

いたばしくりつこもねふくしえん

板橋区立小茂根福祉園

かけがえない個性豊かな社会の一員として「私らしく」住み慣れた地域で普通の暮らしができることを願い、1982年に東京都板橋区に開設。自分のやりたいことにチャレンジしたり、様々な人との関わりを通して、人とのつながりを感じたりすることで豊かな人生を送ることができると考え、転ばぬ先の杖ではなく、転んでもまた立ち上がることができるように、寄り添い共に歩むための支援活動を行っている。生活介護サービスでは、日常の介護を行うとともに、創作活動や体の取り組み（PT訓練）、行事やアトリエ活動を実施。就労継続支援B型サービスでは、「働く」という作業支援を中心に、生活支援、社会活動、行事やアトリエ活動を行っている。作業支援では、企業からの受注作業の他に、清掃作業やKOMONEST商品（グッズ、コーヒー）がある。両方のサービスで行っているアトリエ活動では、イラストやアート活動を行い、豊かな感性や、自由な発想で自分らしい表現が生まれている。

げんだいげいじゅつかつどう

現代芸術活動チーム【目】

個々のクリエイティビティを特性化し、連携を重視するチーム型芸術活動。中心メンバーは、アーティストの荒神明香、ディレクターの南川憲二、制作統括の増井宏文の3名。果てしなく不確かな現実世界が実感に引き寄せられる体験を作品として展開。代表的な作品に、「たよらない現実この世界の在りか」資生堂ギャラリー（2014）、「おじさんの顔が空に浮かぶ日」宇都宮美術館館外プロジェクト（2014）、「憶測の成立」越後妻有トリエンナーレ（2015）、「Elemental Detection」さいたまトリエンナーレ 2016（2016）、「世界に溶けるドキュメント」ヨコハマ・パラトリエンナーレ（2017）などがある。

たかもとあつき

高本敦基

美術家。2005年フランス国立ナンシー高等美術大学大学院修了（D.N.S.E.P号取得）。日常生活でみつかる素材や行動の観察から社会と人間存在の繋がりを見いだす作品を制作する。地域の家屋をアートスペースにした活動や、教育現場、研究機関と連帯したアートの取り組みも行っている。2014年、第17回 岡本太郎

現代芸術大賞特別賞、第15回 岡山芸術文化賞グランプリ受賞。2015年、福武文化奨励賞を受賞。個展に『JUXTAPOSITION－平置思考－』吹上美術館（岡山県倉敷市・2015）、『組み立て式の社会』奈義町現代美術館（岡山県奈義町・2016）、「フレデリック・タイラー氏に花束を』（石川県金沢市・2017）がある。

しゃかいふくしほうじんあさひがわそう

社会福祉法人旭川荘

旭川荘は1956年に開設した総合医療福祉施設。現在、岡山県と愛媛県において医療福祉分野、知的障害分野、身体障害分野、児童・高齢者分野、研修・研究分野で85の事業を展開している。旭川荘には乳幼児から高齢者まで、さまざまな障害のある人々が生活され、余暇活動や日中活動の一環として多様な作品制作に取り組みれてきた。現在も、絵画・造形・手工芸・音楽など、あらゆる領域で、障害の程度や年齢に関係なく、多くの利用者が芸術活動に取り組まれている。2010年には「旭川荘アートギャラリー」を開設し、利用者の作品を常時展示することができるようになった。

いわた

岩田とも子

1983年神奈川県出身。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。身近な自然物の観察・採集から宇宙的なサイクルを体感するような制作をするアーティスト。発表形態は多様で、2012年に畑を舞台に展開した[SILENT MIXER]、2014年に香川県粟島での自然物を採集するプロジェクト「粟島自然観察船」、その他自然学校の講師と共同で森の中で子どもワークショップを定期的に行う。生き物に対する素朴な視点、そこからはじまる学びと表現を大切にしている。

すみともみみひこ

住友文彦

アーツ前橋館長／東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授。NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]、東京都現代美術館などに勤務し、「Possible Futures：アート&テクノロジー過去と未来」展（ICC・2005）、「川俣正 [通路]」（東京都現代美術館・2008）、メディアシティソウル 2010（ソウル市美術館）、あいちトリエンナーレ 2013などを企画。また、2006年にはオーストラリアで行われた「Rapt!:20 comtemporary artists from Japan」展、2007年には中国を巡回した「美麗新世界」展で、共同キュレーターとして日本の現代美術を海外へ紹介する。

にしむらよしあき

西村佳哲

リビングワールド代表。働き方研究者。1964年東京生まれ、武蔵野美術大学卒。建築分野を経て、「つくる」「書く」「教える」3種類の仕事に携わる。デザイン・プロジェクトの企画立案とチームづくり、ディレクションおよびファシリテーター役を担うことが多く、近年は各地の地域プロジェクトにかかわるほか、「インタビューの教室」などのワークショップを主催。著書に「自分の仕事をつくる」（晶文社／ちくま文庫）、「かわかり方のまなび方」『ひとの居場所をつくる』（筑摩書房）など。一般社団法人・神山つなぐ公社理事。

ハーモニー

ハーモニー

ハーモニー

世田谷区にある、心の病をもちながら暮らしている人が利用する施設。昼食を食べたり、簡単な作業をしたり、困った時に相談をすることができる場所である。登録者は30名ほど。見えないはずのものが見えたり、聴こえないはずのものが聴こえたり、なぜか分からないけど強い確信があったり…統合失調症、うつ病、発達障害などと診断されている人が利用している。ゆっくりとしたペースで、それぞれの人が思い思いに日々を過ごしている。ハーモニーでは一般就労や収入を得るという価値観から少し離れて、それぞれに数奇な経験や苦労を重ねてきた方たちが共に支え合い、安心して自分らしさを発揮できるような場をめざして活動を行っている。

クラフト工房 La Mano

東京郊外、町田市の小さな里山にたたずむ築90年の民家で障害のある人と共に物づくりに励んでいる場所が「クラフト工房 La Mano」。工房は1992年に障害のある方の作業所として設立された。名称である「La Mano」は「手」の意味で、設立時に手しごとを中心とした物づくりで魅力ある製品を作り社会と繋がっていく、そんな思いで活動を続けている。現在の活動は大きく2つある。1つは染め、織り、刺しゅうなどのクラフト製品の制作。藍、草木で染めた糸や布を使い、手織りマフラーなどの織り製品、草木染の糸を使った刺しゅう製品、藍染の鯉のぼりや手ぬぐいなど、自然の温かみを感じる製品を作っている。2つ目は2006年から始まったアート活動。小さなアトリエでいろいろな画材を使ってそれぞれが個々の豊かな表現活動をおこなっている。26年目を迎えた活動は着実に社会と繋がりつつある。

年表：TURNフェス3に関わる主な活動

TURNの交流について

アーティストが、障害者支援施設や社会的支援を必要とする人の集うコミュニティへ赴き、利用者や支援者などと交流を重ね、相互に関係する交流プロセスをつくりだす。そのプロセスは、特定の交流先へ定期的にアーティストが通い、施設利用者にとってある種の日常と化していくような交流や、アーティストによる年数回の訪問と出会いを重ねて継続されていく交流もあれば、アーティストが計画したワークショップやパフォーマンスを通してコミュニケーションが深められていく交流、日常の時間の共有そのものを大切にする交流など、さまざまな形態がある。また、アーティストが主導するミクロなミーティングの積み重ねを通して生まれた活動の輪が、TURN フェス3の舞台における大きな推進力にもなっている。

2017年	3月	3-5日 —— 「TURNフェス2～多様な人と出会い、つながる。さまざまな交流のかたちが集結!～」開催 東京都美術館を会場に、「交流プログラム」に参加しているアーティストと交流先の施設から15組が参加。
	4月	7日 —— 永岡大輔とこども会議(大田区内で「こども食堂」を主宰する3つの団体によるネットワーク)の2年目がスタート
		15-16日 —— EAT&ART TAROが、リサーチの一環としてみずのき(京都府)を訪問
		26日 —— 大西健太郎と板橋区立小茂根福祉園(板橋区)の2年目の交流がスタート
	5月	6-7日 —— 「NO LIMITS SPECIAL 2017 上野」参加 上野公園で開催された、パラリンピック競技の魅力を体感できる国内最大規模のイベントで、PRブースにTURNが参加。角銅真実は、交流プログラムを行う中で出会った大田区立障がい者総合サポートセンターの利用者・木村樹さんと、音のある空間を生み出した。富塚絵美は、大西健太郎、テンギョウ・クラとともに、来場者をアルミホイールでキラキラに着飾り、一緒に写真を完成させる対話型パフォーマンスを展開。また、国内外で展開した活動の映像上映を通して、TURNを紹介した。

6月	19日 —— 高本敦基と社会福祉法人旭川荘(岡山県)の2年目の交流がスタート
	11日 —— 第1回 TURNミーティング開催 アーティスト、交流先施設関係者、フォトグラファー、デザイナーなど、TURNのプロジェクトメンバーが東京藝術大学に集結し、今年度の活動に向けた展望を話し合ったキックオフイベント。「TURNの交流プログラムを語る」「TURNの残し方・伝え方」「海外でのTURN-TURN in BIENALSURの紹介-」「TURN LANDを語る」「TURNフェス3に向けて」の5部構成で、終日議論を繰り広げた。
7月	7日 —— 山縣良和と、山縣が主宰する「ここのがっこう」の生徒が、しょうぶ学園(鹿児島県)を訪問し、2泊3日の滞在交流を行う
	11日 —— 高橋正浩[社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンター利用者(昭島市)]が描き続ける高速道路の地図を東京体育館で広げ、池田晶紀・川瀬一絵が撮影
	20日 —— 山城大督が、「見ることのリサーチ」を京都と大阪で実施
	28日 —— 井谷優太が自宅から東京都美術館まで電動車椅子で移動する道のりを、富田了平が撮影
8月	1日 —— TURN公式ウェブサイトリニューアルオープン 交流の様子や、年間を通して実施しているさまざまな活動が追える「タイムライン」や、国内外のTURN参加者が一覧できる「Who」のプロフィールページなどを新設。
	1-5日 —— 今井さつきが、第2回「APDEC(アジア・太平洋フリースクール大会)」にスタッフとして参加
	4-9日 —— テンギョウ・クラが認定特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツに6泊7日の滞在交流を行う
	18日 —— こども会議(大田区)と永岡大輔がTURN LAND「第1回おとな図鑑」開催
	18-20日 —— 「TURNフェス3～見る・知る・TURNする!～」を東京都美術館で開催 これまで3月に開催していたTURNフェスを、8月に初開催。
	30日 —— テンギョウ・クラがハーモニー(世田谷区)で交流 以降、綾瀬ひまわり園(足立区)、はあとぴあ原宿(渋谷区)、特定非営利活動法人ももの会(杉並区)、大田区立障がい者総合サポートセンター(大田区)、小又の里(秋田県)を訪問する。

9月	16日	「TURN in BIENALSUR」展覧会・ワークショップ開幕 南米で展開する第1回国際現代美術ビエンナーレ BIENALSUR に招聘され、日本、アルゼンチン、ペルーの7人のアーティストが参加。8月にブエノスアイレスとリマにて行われた交流プログラムでの出会いと経験を通して生まれた作品の展示とワークショップが、9月16日から10月29日まで開催された。
10月	8日	第2回 TURN ミーティング「TURN を検証する I」開催 「TURN フェス3 を振り返る」「TURN in BIENALSUR を振り返る」に加え、藤浩志氏（アーティスト）、田中みゆき氏（キュレーター）をゲストに迎えて意見交換する3部で構成。「TURN in BIENALSUR を振り返る」では、TURN in BIENALSUR に参加した五十嵐靖晃と永岡大輔による、帰国直後の報告会を実施。また、地域や福祉分野で実践されている諸事例を共有するとともに、TURN の取り組みや特性についてゲストとともに議論した。
	25日	伊勢克也が、桃三ふれあいの家（杉並区）を初訪問
11月	19日	第3回 TURN ミーティング「TURN を検証する II ～TURN が描く社会～」開催 日本の障害者福祉における表現やパフォーマンスを研究する長津結一郎氏と James Jack を迎えて、「社会包摂」と「社会実装」をキーワードに、TURN が描く社会について語り合った。研究者やアートプロジェクトの実践者としての視点とともに、アーティストならではの語りを交えながら議論し、TURN LAB の今後の重要性が確認された。
12月	8日	山城大督が、「点字つき絵本の出版と普及を考える会」の定例会議に出席
	14-18日	滝沢達史が、一般財団法人たんぽぽの家（奈良県）、みずのき（京都府）を訪問
	26日	滝沢達史が、エベレスト・インターナショナルスクール・ジャパン（杉並区）を訪問 岩田とも子が、特定非営利活動法人 EPO（静岡県）を訪問

2018年	1月	12-14日	森山開次が、こころみ学園（栃木県）で2泊3日の滞在交流を行い、その様子を富田了平が撮影
		16日	TURN LAND の一環で、東京大学大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構（西東京市）での活動がスタート。岩間賢を中心に、シュレー大学（新宿区）の学生が参加し、畑でのワークショップなどを行う
		24日	EAT&ART TARO が、摂食障害に関するリサーチで、当事者や経験者へインタビューを実施
		28日	第4回 TURN ミーティング～年次報告会～開催 東京国立博物館平成館大講堂を会場に、「この一年間から考える、これからの TURN」「地域への広がり」「手業からはじまる交流」「『ほぼ日』と TURN」の4部構成。プロジェクトメンバーである山城大督、新澤克憲、五十嵐靖晃、EAT&ART TARO、岩田とも子、永岡大輔と、鈴木一郎太氏（大と小とレフ取締役）、野老朝雄氏（アーティスト）、杉山摩美氏とゆーないと氏（ほぼ日刊イトイ新聞・スタッフ）をゲストに招き、地域への広がりを視野に入れたアートプロジェクトのあり方や、伝統的な要素を取り入れた社会へのアプローチなど、年間をとおして浮かび上がってきた重要な言葉や要素を交えて語り合った。
		31日	山城大督が、はあとぴあ原宿（渋谷区）を訪問し、全盲の利用者の方と交流する
	2月	12日	こども会議（大田区）と永岡大輔が TURN LAND「第2回 おとな図鑑」開催
		23日	ハーモニー（世田谷区）と深澤孝史が TURN LAND「かみまちハーモニーランド」開催（～3月3日まで）
	3月	11日	クラフト工房 La Mano（町田市）と五十嵐靖晃が TURN LAND「手のプロジェクトー綿と糸ー」開催
		17日	板橋区立小茂根福祉園（板橋区）と大西健太郎・宮田篤が TURN LAND「『お』ダンスプロジェクト」公開稽古開催

文責：畑まりあ（アーツカウンシル東京）

あとがきにかえて

TURN フェス2を2017年3月に開催してから、わずか半年後に実施したフェス3において、かつてない規模の展示、パフォーマンス、トークなど、盛り沢山のプログラムが実現した。功を奏した理由の一つに、交流プログラムの成果を美術館で発表するのみならず、より自由なコンテンツをもってTURNフェスへの参加を可能とするレギュレーションの見直しあげられる。そのことがフェス3の可能性を広げた。

新たな可能性を見出すきっかけを導いたTURNフェスのレギュレーションの見直しというのは、単なる思いつきではない。この改善はTURNへの理解の増進や当事者感が関係者の間に広まったことによって実現したものである。継続は力となるのだ。

これまでTURNフェスは、通年の活動であるTURNの交流事業の成果をお披露目するために一堂に会する場として構成されて開催してきた。その2度目のフェスの後に実施した関係者へのヒアリングでは、「作家として、施設として、個人として、より自由なかたちでフェス参加できたら良いのだけれど」「交流先施設としての固有の役割に縛れることなく、一人のパフォーマーとしていずれは参加したい」といった言葉も聞かれた。

そのような言葉を受けながら、2017年6月に開催した第一回TURNミーティングでは、アーティストによるTURNへの参加の入り口を「交流」とする点に変更はないものの、実施主体を施設とする「TURN LAND」の取り組みに加え、TURNフェスのために新しく立ち上げられる企画の参加も歓迎することを明らかにした。これを受けるかたちで、富塚恵美がマダム ボンジュール・ジャンジとの新企画を提案し、TURN監修者の日比野克彦によって了承された。

2017年度は、展開の仕方が更新されていく段階にもかかわらず、「ひとがはじめからもっている力」を基軸に始めたTURNの取り組みが潜在的に持つ可能性を、深く理解し評価する海外の専門家の存在も現れる年となった。2016年、『リオデジャネイロ2016オリンピック・パラリンピック』に連

動するかたちでブラジルのサンパウロとリオデジャネイロで実施したTURN in BRAZILが端緒となり、その1年後の2017年8月～9月には、南米からの世界発信を標榜する新しいコンセプトで構成された第1回国際現代美術ビエンナーレBIENALSURに招聘されたのだ。

この思いの外早い海外からの眼差しは、TURNの定義を含めた言説の検証を行うことの重要性を改めて示唆する。2017年10月と11月に実施したTURNミーティングでは「TURNを検証する」をテーマに実施した。また年間の活動を発信していく体制として、TURN公式ウェブサイトをリニューアルし、アーティストや交流先での日々の活動が追える「タイムライン」を新設した。昨年度に引き続き制作した「TURN NOTE 2017」には、活動時の雰囲気・余韻・気配を帯びた言葉が並び、TURNの交流の成果と意味合いに立ち返ることができるはずだ。

フェス3の会場は、次の5つの構成に分けられる。(1) テーマの「アクセシビリティ」を可視化した展示や、そのテーマに回答する山城大督による新シリーズ。(2) 山縣良和が主宰する「ここのがっこう」や、アーツ前橋で開催された企画展「表現の森 協働としてのアート」における滝沢達史の展示などの、TURNと親和性がある団体や企画の参加。(3) 交流の賜ともいえる高橋正浩と池田晶紀・川瀬一絵の作品や、大西健太郎と板橋区立小茂根福祉園のワークショップなど、交流プログラムによって培われた関係性が披露された企画。(4) らくだスタジオによるアーカイブ映像の展示。(5) 富塚絵美とマダム ボンジュール・ジャンジによる《光の広場》というフェス3に向けた新企画。

TURNフェスとして初めてテーマを設けた今回のフェス3では、「アクセシビリティ」について思考する中、発表だけではなく、享受する権利の保証をどのように具体化するのかが大きな課題の一つとなった。静岡県浜松市の認定NPO法人クリエイティブサポートレッツの利用者が、スタッフと共に東京都美術館を訪れる様子をレポートしたテンギョウ・クラ

は、自由気ままに過ごす彼らを会場全体で受け入れていた場を、TURN公式ウェブサイトの「タイムライン」(2017年9月1日付)で次のように綴っている。「このとき思ったのは、TURNフェス3の会場には僕が形としては見るできないけれど、太田君やタケシ君にはハッキリと感じられるコンフォートゾーンがあるのではないかとことです。(中略)日頃僕があまり気にせずやり過ごしているような変化も彼らにとっては耐え難いストレスとなることがあるのです。その変化を察知するために、彼らの身体センサーはきっと僕のものより遙かに繊細になっていると思います。そのセンサーを使って、太田君やタケシ君はフェスに意図的に用意されていたか、もしくは偶然そこに立ち上がってきたコンフォートゾーンを見つけ出していたのでしょうか。」

《光の広場》を構成した富塚は、過去の経験において、床に置いたモノが作品化してしまう美術館という空間の特性を学び、その経験からフェス2では展示室を「楽屋」に見立て、佇み過ごす空間を提示した。来場者がTURN的な経験と出会いながらその場に居られるようにするにはどうしたらよいのか。今回はそのために必要な要素をすべて持ち込み、参加者を「日常の私」から「仮想の私」へと意識を変容させる仕掛けを巧みに張り巡らせた。「言葉を発してはいけないルール」に戸惑う来場者に寄り添ったり、勝手気ままに過ごしたりするバックグラウンドのパフォーマーの配備や照明と時間帯による空間演出は、マダム ボンジュール・ジャンジの1日2回のショータイムをハレとし、その数分以外は好き勝手に振る舞いながら《光の広場》を通過したり過ごしたりする来場者を歓迎する場を担っていた。

これらさまざまな活動とエネルギーに満ちたフェス3を通して生まれた余韻を、《知覚のライン》を計画した馬場正尊は、「欠落に対する圧倒的な寛容さ」という言葉で表している(本書28頁参照)。この感覚を馬場が抱いたのは会場内ではなく、参加メンバーが集った上野の小さな飲食店でのことだが、馬場がこのとき感じていた「圧倒的な寛容さ」は、自己を規定する日頃身にまとう「自分らしさ」も、他者からの「あな

たらしさ」というラベリングもない、自他を分節する境界が滲み消え去ったときに出現する「コンフォートゾーン」の賜だったのではないか。しかしそれは「震災のユートピア」のような一時の状況として現れ消え去るものではなく、プロセスを経て用意された「圧倒的な寛容さ」によって意識的に創出された「コンフォートゾーン」だ。偶然が引き寄せた必然ではなく、意志ある行為が引き寄せた必然だとしたら、どんな因子が可能としたのか。その所作は共有可能な知となるのだろうか。

テンギョウ・クラが感じ取った「コンフォートゾーン」は、さまざまなプロセスと要素によって多様性のある濃淡と粗密な空間が渾然一体となって生み出された。それは、そこに人が居合わせることで生み出された奇蹟的な必然であり、またそれによって呼び寄せられた偶然の産物なのだ。TURNフェスが通年の活動のショーケースとしての機能を果たすだけでなく、TURNを体感し考える場としても機能する。このことを2017年のタイミングで目撃できたことは、関係者にとって大きな経験となった。

2年後の『東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会』の開催時期との重なりも視野に入れ、これまで3月に開催していたTURNフェスを初めて8月に移行させたTURNフェス3。お盆の時期には、物流が止まり、資材や備品の調達に慌てる局面もあったが、最終的には約2,300人の来場者に恵まれ、67人のサポーターに支えながら、24のプログラムを展開することができた。15組の参加アーティスト・交流施設での取り組みを紹介する3日間で関与した表現者の数は150人を超えている。2018年8月に開催予定のTURNフェス4では、「非常日常非(ピッジョップピジョッピー)」をタイトルに、TURNの新しい可能性と出会えたらと思っている。

森 司

TURNプロジェクトディレクター

TURN フェス3 ドキュメントブック 2017

平成30年3月23日 発行

監修：森 司 (アーツカウンシル東京 TURNプロジェクトディレクター)

編集：小林英治

編集協力：アーツカウンシル東京 [浅野五月、奥山理子、畑まりあ、山内祥子、山口麻里菜]

デザイン：星野哲也

映像：富田了平 (p16-17)

写真：テンギョウ・クラ (p18 左, p19)、畑まりあ (p23)、川瀬一絵 (p43-45)、
渡邊梨恵子 (p51左列4段目, 右列3段目)、荒神明香 (表2-表3)、
伊藤友二 (上記以外)

写真協力：プロジェクトスクール@3331 (p13下, 20)

印刷：株式会社山田写真製版所

発行：アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階

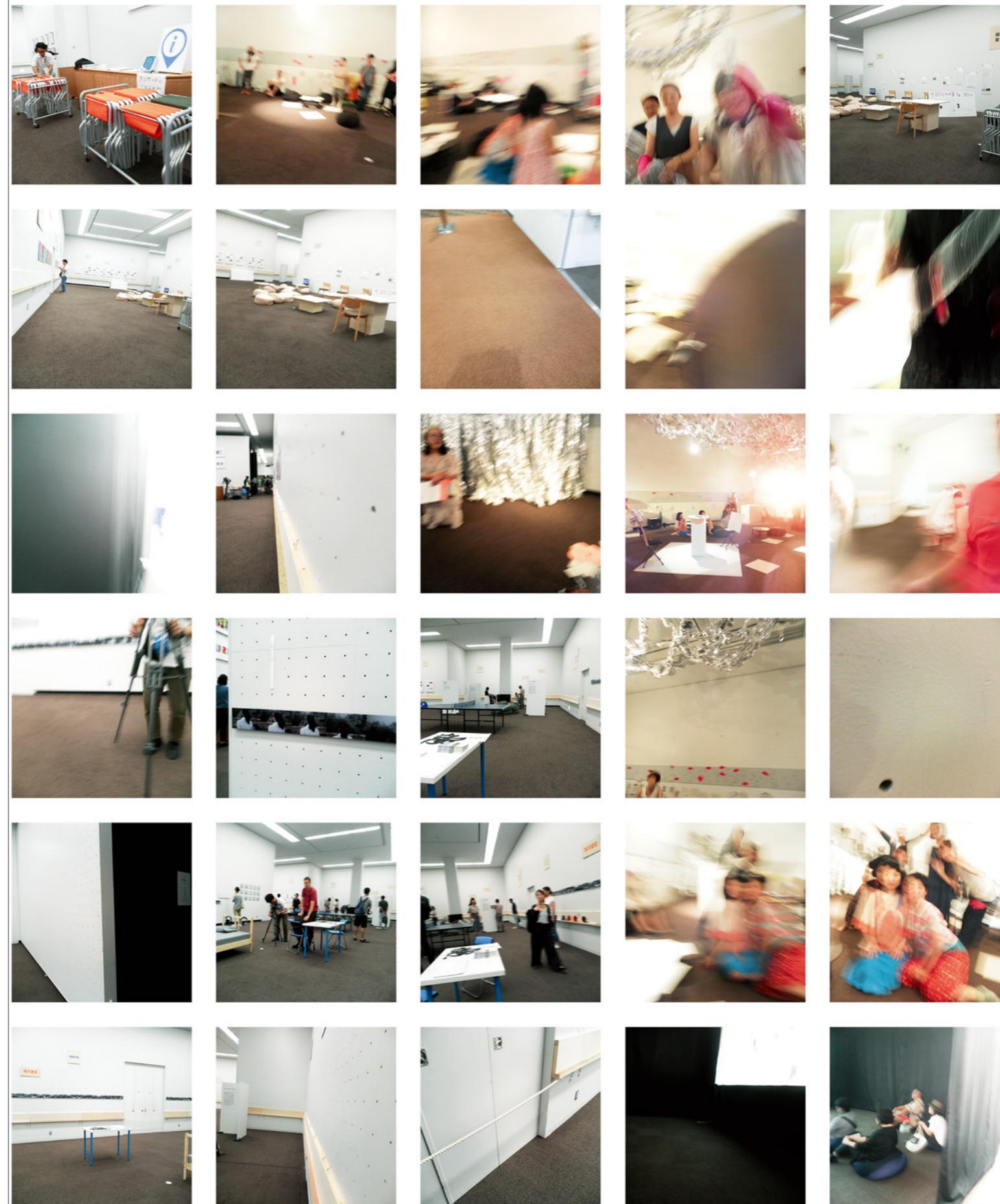
Tel: 03-6256-8435 / Fax: 03-6256-8829

Email: info@turn-project.com

URL: www.artscouncil-tokyo.jp

TURN公式ウェブサイト: <http://turn-project.com/>

©2018 Arts Council Tokyo
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved



現代芸術活動チーム【目】の荒神明香が撮影した「気配」のインスタント写真

